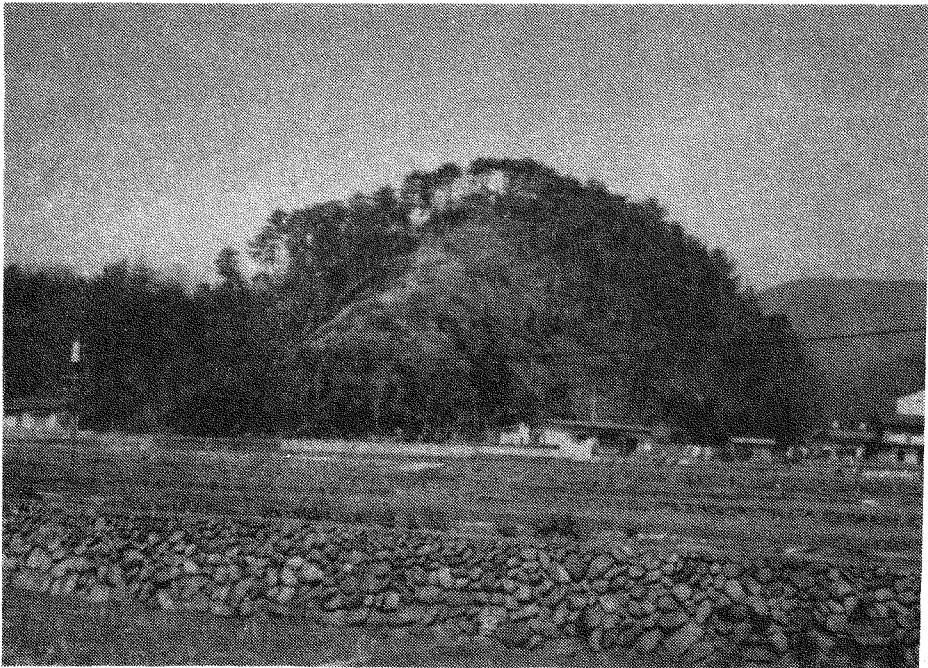


山城志

SANJYÔ SHI

第2卷5号 1983年冬の号



備陽史探訪の会
城郭研究部会編集

目 次

吉備に於ける備後地方の性格	山 口 哲 晶	1
『師守記』にみる尾道	提 勝 義	8
統備南中世山城跡の現状(Ⅷ3)	田 口 義 之	15
二子山城物語	武 島 種 一	22
三原史跡めぐり	末 森 清 司	25
高地性集落についてI	七 森 義 人	32

表紙写真解説

南より見た日隈山城跡(新市町上安井)、
「備後古城記」によれば龜寿山城宮氏の家老
日隈肥前守入道快真という者が居城したとい
う。山上に平坦地等が残り、「首立場」等の
地名を伝えている。

吉備に於ける備後地方の性格

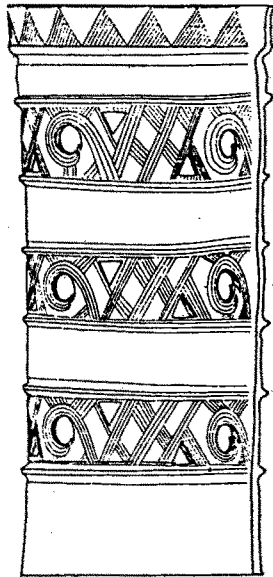
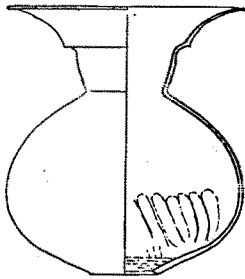
山口哲晶

吉備の国は、現在の岡山全県と広島県の東半部にまたがり、瀬戸内海に面する山陽路の真中に位置する。気候は温暖で土地は豊かである。縄文晩期に北九州で始まった水稻農業の発展の条件を、^①水田造成の為の沖積層の広がり、用水源としての河川の水量と貫流の仕方、水田利用の極限としての現代の二毛作田の面積、の三点を取り上げ、畿内と吉備と北九州の三地域を各々比較してみると、農業生産力に於ては畿内が圧倒的に優位に立ち、吉備がこれに次ぎ、北九州はやゝ劣る。又、政治勢力の結集の難易を地形的条件から見てゆくと、畿内は奈良盆地という一つのまとまった自然地域をもつとともに、淀・大和の二大河川で三区区分されるが、又、有機的に結合し得、いくつかの政治集団の割拠とその統合を可能にし得たのである。吉備の場合は、いくつかの政治集団がほぼ同じ様に割拠し得る条件を備えていたといえよう。北九州ならば、平野が三つの地域に分断されており、大形の政治勢力の結集に不利であったといえる。こうしてみると、吉備はこの面でも畿内に次ぐ有利な条件を備え、北九州に抜きんでいた。以上のように自然環境の諸条件のもとでも吉備という国は、畿内に次ぐくらいの大勢力に成長し得る土壌はあったのである。

こういう条件のもとで、弥生時代中期以降、同一小地域内に於て、一個の世帯共同体とみられる集団の共同墓地内に、家父長世帯が^③台頭してき、その墳墓が一步づつ古墳に近づいてゆく推移は、吉備に限らず他地方にもみられるが、近畿に於て方形墓が前期末に始まり、中期以降は群在化する傾向があり、その先進性を認めざるを得ないが、ほとんどが平地に立地し、方形周溝墓と呼ばれる様な遺存状態を示しているのに対し、吉備では、基本的に丘陵上に立地し、円形のものをも含み、遂には、方墳と区別できないまでに発達してくるのである。

さらに吉備では、^④北部九州に源流があるとみられる竪穴式石室を近畿に先立って導入している事や、特に特殊つぼと特殊器台を創出し発達させた点は、首長靈祭祀の独自性として明確に近畿や他の地域と区別される。この特殊器台と呼ばれる土器は、兵庫県から岡山県井原市、あるいは備後でも、山陰の島根県でも出土し、吉備の勢力範囲と思われる地域に分布しているが、中心はやはり吉備の中核地域の岡山県南部であり、やがては円筒埴輪に転化してゆくのである。とにかく、古墳の出現期に於ては近畿は優位な立場に立っていたとしても、吉備では首長靈祭祀の形態が、近畿と異なる独自性を持っていたと言う事ができる。

初期の古墳の規模と数を見るならば圧倒的に畿内の方が優位な事は明らかであるが、その中で、吉備創出の特殊器台は畿内に伝わっているのである。奈良県桜井市箸墓古墳からは宮山型の特殊器台が、^⑤又同系統の文様を刻んだ木製品が桜井市石塚古墳の近くからも検出されている。そして又、宮山の特殊器台に継続する初期円筒埴輪も吉備に於て成立し、近畿に及んでいる。すなわち、箸墓古墳からは吉備的な有文円筒埴輪が検出され、同時に近畿的要素の強い文様・技法のものもあるし、吉備の特殊壺の形態を強く残しながら埴輪化したものもある。又、京都府向日市の元稻荷古墳からも有文円筒埴輪と壺が検出され、奈良天理市の手白香皇女陵と伝えられる西殿塚古墳からも同様のものが出土して



0 15cm

図1 岡山市都月1号墳出土の有文円筒埴輪と壺形土器(近藤・春成「埴輪の起源」による)

いるという。

この様に古墳を構成する要素の中で重要な埴輪が吉備に起源し、早く近畿に受容されたという事実は、古墳成立時に於ける近畿の主導性・優位性が絶対的なものではなく、互いに同化し合っていた事を示すものであろう。近畿と吉備の各首長達はお互いに相争う事よりも同化する事にあるいは努力していたのかも知れない。こうする事により、自らの勢力を確実なものにしてゆくのが、安全で確実な方法であると考えたのであろう。

この様に古墳時代前半期に於ける、吉備と近畿との関係は未だ、吉備の主体性を否定するまでには致っていない。

五世紀前半の古墳時代発展期になると、吉備政権の中枢地域に突如として全長三五〇メートルの巨大墳、造山古墳を築く。その後には二八〇メートルという作山古墳が続いて築かれている。この時、同時期の他の古墳をみると、一五〇メートル前後の現状維持、あるいは規模が縮小してしまっている。この事は、吉備の大王家を中心にして諸部族の結束がいかに強くなっていたかを示すものであろう。

近畿の大王陵に匹敵する程の巨大墳を築き得た吉備政権は次の様な物質的基盤の上に成り立っていた。先ずは沖積平野である岡山平野の豊かな農業生産力、加えて豊かな労働力を擁し、鉄製農具を整備し、耕地の拡大と増産を図った。というのは、巨墳を築き得たところから言えよう。次に中国山地と吉備高原の林産・鉄・銅及び瀬戸内海の塩等各種の天然資源を包蔵し、その開発利用をした。周知の通り、鉄と塩は、近畿や他の諸地方では大量生産はきかず、吉備の特産であった。とりわけ、鉄に関しては、五世紀の近畿政権の有力首長墓に鉄製武器が大量に副葬されているが、それらの生産がどこでなされ、近畿政権がどの様にそれに関与していたのかは判然としない。

ところが、吉備に於ては五世紀代に瀬原町の月の輪古墳の墳頂部に鉄滓が存在したことからみれば、四世紀末から鉄の生産体制は確立していたのである。

この様に吉備が鉄の量産体制を持っていたという事は、鉄製武器の装備を通して軍勢力の強化には極めて有利であった。加えて四世紀代の吉備中枢の首長墓が、岡山市湊茶白山古墳をはじめとして、岡山平野と瀬戸内海の両面に臨んで造営されている事や、牛窓湾の様に四世紀末から六世紀前半にかけて首長墓が営まれている事は、瀬戸内海に於て最も有力な海上活動集団、つまり水軍を保有していた事が考えられる。それゆえに、現在造山古墳の前方部に置かれているくり抜き式長持形石棺や、山陽町小山古墳の舟形石棺は、九州阿蘇の凝灰岩であるときれている点、あるいは、牛窓湾内の黒島の黒島二号墳をはじめ、いくつかの古墳から新羅土器が出土している事や、福山市本谷二号墳から目下別島唯一の双竜文石釧が出土しているという事を考える上に水軍の保有という事を考えれば納得できる

のである。

^⑬この様に、日本列島に於て近畿に肩比する地位にあった吉備政権は、当然近畿政権と並んで、あるいは近畿政権に代って、古代国家統一に向う進路に於て、中枢たりうる可能性を持っていた時期があった事は否定できない。記紀の中の近畿政権の各地征服の物語にはしばしば、吉備の首長が加担し、重要な役割を演じているのも五世紀代の近畿政権とともに、その動きの中心的地位にあった事を意味しているのであろう。

^⑭五世紀に於ける吉備政権の大首長が、相ついで近畿の大王墓に匹敵する巨大前方後円墳を築いたという事は、吉備の政治的・軍事的・経済的な実力の強大さの誇示に他ならないであろう。しかし、同時にそれは、吉備の首長が近畿政権と一層密接な関係になっていった事でもある。吉備の首長墓をみる時、吉備の独自のものを発展させるのではなく、反対に独自性を失い、近畿色の中に溶け込んでいく傾向を見せている。前方後円墳の普及、造り出しの付設、堀をめぐらす、陪塚を伴う、長持形石棺を用い、形象埴輪にも特徴らしいものがない等の点は、まさに近畿化の現れである。

この様に五世紀前半頃までは、近畿政権とはかなり同調的な姿を呈しているが、五世紀後半頃から対立関係に入ってゆく。それは、^⑮基本的には、首長層の目ざす地域的結束の路線と、近畿政権が列島の中心に君臨せんとする路線との対立矛盾であった。そういう中で、いくつかの有力地方政権は近畿政権に反発を始めた。その中で吉備は、卓越した特色ある経済的基盤、とりわけ鉄の量産体制を確立させる事により、極めて有利な立場に立っていた。この事は、近畿政権にとっては大きな脅威となった。又、吉備が、近畿から九州地方に向う海陸の中間地点にある事も近畿政権にとっては不都合であった。北部九州をはじめ、西日本各地を服属させる為には、先ず吉備を屈服させる必要が不可欠となったのである。

^⑯「日本書紀」雄略七年条に、下道臣前津屋の大女と小女や、大雄鶏と小雄鶏と闘せて大王を呪ったという説話や、同年条の朝鮮に渡った上道臣田狭が、妻稚媛を大王に奪われた事に怒り、新羅によって反抗したという説話、そして後日譚としての清寧即位前記に、星川皇子の大王位篡奪のクーデターに上道臣が加勢せんとして挫折した説話が載せられている。所謂、吉備の反乱記事である。

吉備のこの反乱に敗退した五世紀末頃、吉備の中枢部の大首長墓に径百メートル前後の、そして間もなく、数十メートルの帆立貝式古墳が多くなる。こういう現象は吉備に限らず各地の有力部族もほぼ共通するが、この事は、近畿の覇権が列島各地に及んできた事を示しているであろう。又、「上道」・「下道」の様に近畿を中心として、近畿側に向い近い方を「上」として呼ぶことも近畿政権の優位性の現われである。

^⑰六世紀になると、吉備の中枢東端にあたる大伯の長船に船山古墳という前方後円墳が出現する。これは、前方部が極端に開き、かつ高い特異な形態をしている。この形態は真に近畿の大王墓陵に比定されている、伝清寧陵・伝安閑・伝仁賢陵と同じ特徴をもっているのである。という事は、再び近畿の大王とこの地の首長との間に密接な関係が成り立った事を意味している。

しかし、いくら再び吉備と近畿政権とが、密接な関係になったとはいえ、当然吉備の反乱以前との様な融和的なものではなかったであろう。反乱に於ては吉備は敗退したのであり、その結果として、近畿政権が優位に立っていったのは明らかである。ところが、後に吉備の周辺より、近畿政権の大王

式石室をもつ山の神前方後円墳や、これも又大形の横穴式石室をもつ二子塚前方後円墳が現われてくる。これらの古墳の墳丘自体は、山の神古墳が40メートル、二子塚古墳が70メートルととりたてて巨大とは言えないが、横穴式石室を主体とする後期の古墳が前方後円の形態をとるという事自体重要な意味を含んでいる。

当時の列島の中心地域の畿内にさえ、この様な形式の古墳は数基しか知られておらず、吉備全体に於ても総社のこうもり塚等三基しか知られているにすぎないという事からも、吉備の反乱を境にして、吉備の西部に新たに次代をになう勢力が出現して来た事を意味しているであろう。

それは、在地の豪族が、吉備包括の為に進出して来た畿内政権と結びつきを強めた結果であるのか、あるいは、畿内政権自体が直接に進出して来た結果であろうと推測できるが、このどちらかは未だ検討の必要があろう。

この後の備後における古墳時代後期から終末期にわたる古墳はかなり特殊である。大佐山白塚古墳・曾根田白塚古墳・猪の子古墳・尾市古墳等、当時の畿内でも主要な氏族しか使用しなかった花崗岩の切石で築かれている事や、石と石との間隙に漆喰の施されている事や、さらには横口式石槨の構造を持っている点に於ては、畿内を除けば、全国的にも稀有な事であり、この事からも屯倉設置以来の畿内政権とのつながりの深さを知る事ができるだろう。漆喰については、「白塚」と呼ばれている通り、壁面に漆喰が施されていた可能性も考えられ、又、硬度の高い花崗岩を削る技術は、当時の畿内政権と密接な関係にある瀬戸内沿岸の勢力が朝鮮より新技術を畿内に伝える中継点の役割を果たしたのかも知れない。そういう中で、新技術を持った工人集団が、この地にも拠点をおいた可能性は充分にあり得るだろう。

そういう特殊古墳の中でもとりわけ珍しい形態をとる古墳がある。石槨が十字形の平面を持つ尾市古墳である。この古墳は前述の通り畿内色のかかなり濃い特長をもち、しかもそれが十字形の平面を持つという点に於てさらに特殊なものである。ただ、奈良県の牽牛子塚古墳の一つの石室を間仕切り、二つの部屋としている様な点に於てその起源を求められるかも知れないが、今後の充分な検討が必要であらう。

ここにもう一つ注目すべき地域がある。安芸の東南端地域、今の豊田郡本郷町である。この地域も古墳時代前半期には注目される古墳はなく、ただ五世紀末頃の兜山古墳というやや大形の円墳が注目される程度であるが、六世紀に入ると突如として、広島県最大の横穴式石室をもつ梅木平古墳が出現し、貞丸一・二号墳、そして終末期古墳である御年代古墳に至る。こういう過程は備後の中心地域と極めて類似している。特に御年代古墳は、花崗岩の切石で構築されていて、備後の終末期古墳と同様に畿内色の濃いものである。

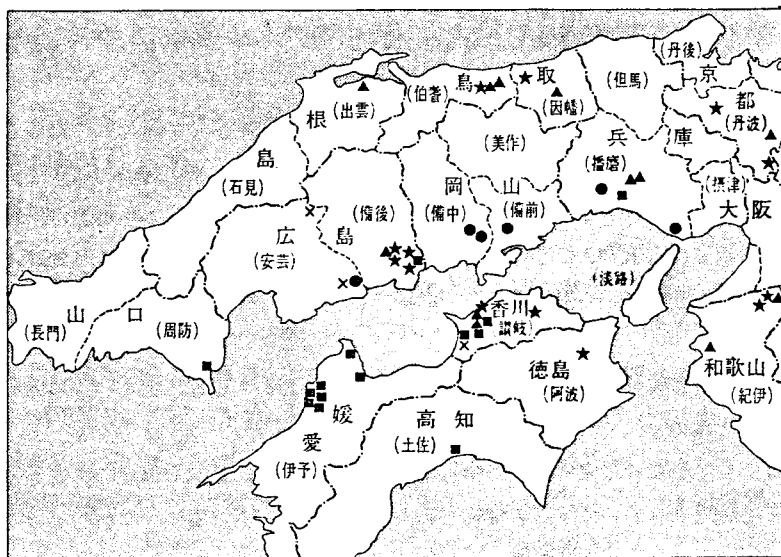
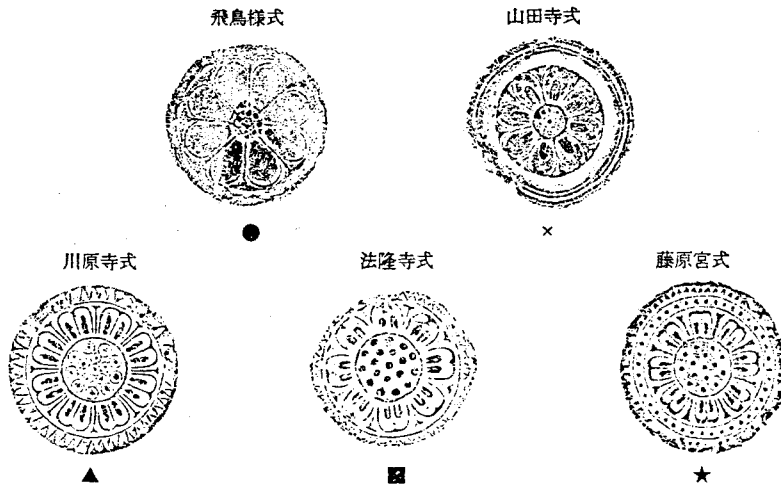
それと共に、この地域にも屯倉は設置されていた。沼田川と旧山陽道との交点に三田という地名があり、これも又、備後の状況と極めて似ている。

畿内政権の吉備征圧過程に於て先にみた様に備後の中心地域に集中的に置いた屯倉は同時に安芸の国の最も備後よりの地域にも設置されていた。この地域もいうまでもなく、沼田川という河川があり、後の山陽道があり、瀬戸内海にも近く、交通の要衝であった。畿内政権はこの地域も掌握していた。吉備の西部に屯倉を置いて、やがて吉備の中枢部に児島の屯倉を置いて吉備を征圧して行った畿内政

権は備後に集中的に屯倉を設置すると同時に安芸の東南端にも屯倉を置いて横からだけでなく背後からも包囲していったのではないかと考えられる。その為の重要な拠点として、この地域を選んだと思われる。

この地域には沼田川があり、早くより山陰と山陽とを結ぶルートが開けていた。それは沼田川の支流の椋梨川上流にタタラ製鉄の跡があり、沼田川流域を北上し、三次から東に分岐すれば古代出雲の製鉄地帯として名高い横田盆地に通じ、さらに三次より北方に「波多郷」があり、この波多の小川流域には「鉄(まがね)あり」と鉄の産出が出雲風土記に特記された所でもある。又、この「波多」は秦氏に通じ、かかわりが想定できる。

この様に、これらの人々をも含めて山の人々の生活集団、あるいは鉄を通じての民間ルートは古くより形成されていたと思われる。畿内政権はこの山陰と山陽を結ぶルートを掌握し、吉備の東西からの



主要中央(大和)寺院様式瓦の分布

松下正司「古代の地方史」による

征圧に加えて背後にもこのルートを通ってまわり込もうとしていた。それは、備北の庄原市高町に、小形の単葬墓ながら切石を積んだ構造をもつ篠津原三号墳があることから考えられる事である。さらにこの地域は、出雲の征圧へのルートの確保の為の中継拠点としての性格を持っていたと考えられる。それは、このルートを通じて備後の背後にまわり込めると同時に、出雲にも直接的に進攻できる位置にあたるからである。

沼田川支流の椋梨川上流の山中に「安宿」(アスカ)という地名があり、これが畿

内の飛鳥（アスカ）と通じる事や、飛鳥様式の瓦を出す横見廃寺がある点に於ても、いかに畿内政権がこの地を重要視していたかがうかがわれる。しかも、出雲の須佐の地にソガ川という川があるが、このソガも6世紀中頃より畿内政権の中に於て台頭して来た蘇我氏の蘇我に通じ、この地域より出雲に進攻していった結果としてとらえられるかも知れない。

この様にして、畿内の大王陵に肩比する程の巨大墳を築き得た吉備王国も、反乱を境にして周囲より、屯倉というクサビを打ち込まれてゆき、最終的に児島の屯倉に於て止めをさされていった。その吉備包括過程の一端をになった備後の地は、畿内政権と深いつながりを持って、全国的にも数の少ない特殊な終末期古墳を築いていった。

やがて、古墳時代が終っても畿内政権と深く結びついた人々によって畿内色の強い文様の瓦をもつ古代寺院が備南の地に乱立してゆくのである。

加えて、蘇我氏と深い関係をもちながら吉備包括の一端をになったはずの安芸本郷周辺は、備南地域に比べ畿内色の濃い古代寺院が少ないのは、あるいはもともと出雲征圧に重点を置いていたのかも知れない。

又、蘇我氏の滅亡と何かかわりがあるのかも知れない。

<参考文献>

- ① 西川 宏 「古代の地方史」 朝倉書店 1977年
- ② 前掲①
- ③ 佐原 真 「農業の開始と階級社会の形成」 岩波講座日本歴史1 岩波書店1975年
- ④ 前掲①
- ⑤ 笠野 毅 「大市墓の出土品」書陵部紀要27 宮内庁 1975年
- ⑥ 前掲⑤
- ⑦ 前掲①
- ⑧ 前掲①
- ⑨ 森 浩一 「日本古代史における鉄問題の推移」 日本史の研究29
- ⑩ 前掲①
- ⑪ 〃
- ⑫ 本谷遺跡調査団 「本谷遺跡発掘調査概報」 福山市教育委員会 1973年
- ⑬ 前掲①
- ⑭ 〃
- ⑮ 〃
- ⑯ 〃
- ⑰ 〃
- ⑱ 〃
- ⑲ 門脇禎二 「出雨の古代史」 NHKブックス 1983年
- ⑳ 前掲⑱

（古墳研究部会副部長）

師守記にみる尾道

提 勝 義

1. はじめに

備陽史探訪の会が今回よりタイプによって印刷されるとの事で非常に結構なことと思うので私もつたない文章をよせることになった。

「師守記」私がここに引用するのは、統群書類従完成会より刊行されたものである。師守記は帝国図書館当時「師茂記」となっていたようであるが、編者の藤井貞文氏、小林花子女史によると、実際の執筆者は大外記中原師茂の弟である中原師守によってなされているので、師守記とするのが妥当との事である。⁽¹⁾

この師守記は大外記家に関する事について細かく書かれたもので、その記述年代は、暦応二年(1339)から応安五年(1372)の間のことである。

中原氏と尾道との関係は、中原氏が⁽²⁾大炊寮領の管理をしていることである。尾道の大炊寮領としては栗原・吉和保、歌島、そして栗原保の中の御所崎であり、その他広島県内には高屋保^(秋カ)、^(秋カ)反町がある。師守記の中に出てくる栗原保や吉和保に関係する年代は、暦応二年(1339)から貞治六年(1362)のことであり、その内容はきわめて断簡的であり、つながりのないものであるが、ある時期に栗原保や吉和保にどのような人物がいたのか、武士の侵略に対してどのように対応していたのかおよそのことを知ることは出来るのである。

師守記記載の大炊寮領については、すでに青木茂氏が新修尾道市史第1巻の中でとりあげておられて、今さらここで述べる必要はないとも思うけれど、草戸千軒町や鞆・尾道の発堀もおこなわれ、中世史の世界でも網野氏や石井・勝保・笠松・横井氏等の活発な研究が進められて、中世の世界の新たな見直しや、再確認がおこなわれている今日もう一度ここに師守記の概略を記述しておこうと思う。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

2. 師守記の記述

栗原保や吉和保に関係する人々は、相原氏、安芸入道円源、その子供の将監師上、兵部大夫入道了円、安木入道、吉和・栗原公文、岩崎律師、中原家の人々とその家使である左近太郎、友阿等である。

暦応二年(1339)七月廿五日壬午、天晴

今夜二十五味如例、今日栗原保、泉州〔 〕僧覚円賜御下知、予書之、

暦応二年八月一日、今朝相原十帖進上家君次進頭殿御方^(師右)、^(師茂)扇三本・筆一差^(秋カ)、墨一廷^(秋カ)、御返檀紙三帖、打輪一、茶二種等也、予女房扇二本秋一被覆之不及返、予憑人々、覚照房茶一種^(秋カ)、返帶一、花平莒納自物、次外記殿扇二本・墨一廷・返茶一種・蛸一・満重三等也、次善覚満重十、無返、次大炊允扇二本、無返次新左衛門蛸二無返、次女姓憑物御料人有返、次頭殿御方、小人二人憑之、幸甚々々

暦応二年九月十九日

今日自備後国栗原保飛却到来、是依損亡事也又空一房来臨、

曆応二年十二月七日

辛卯、天晴、今日自栗原保御書櫃到来、二十合其外監・味曾以下到来、幸甚々々

曆応三年(1340)三日十九日

今日岩崎律師參入、去廿六日自備州上洛云々一瓶持參但代也、用途三貫文、荒差一、家君有御対面、
被進賜一献、幸甚々々、

曆応三年四月二日

今日自岩^(崎)律師許賜布三卷、幸甚々々

頭殿御方布五卷進之、外史方へ三卷進之、各被遣反事了

曆応三年四月十日

癸己、天晴、入夜雨降、今日布一段進上御前去二月岩^(崎か)嶮律師志内也

曆応三年四月十五日

是日故大炊助入道色円子息兵部丞師幸參入此間自備後上洛云々、持參一瓶料、一貫文有其興、幸甚
幸甚

曆応三年四月廿一日

甲辰、天晴、今朝岩嶮律師慶祐參入、明日可下向備州云々、被進一献賜茶并鞆弓等

康永四年(1345)年三月十三日

今日安芸入道先參高野去十日出家、法名円源^{日来俗之時}若党四人、中間三人同出家云々將監師上・
兵部大夫入道了円等同上洛。

今日安芸入道酒肴三結・蕪撰二紙袋被進之云々又掃部左衛門入道酒肴料一結進上云々

康永四年三月十八日

壬寅、早旦家君^{墨染}同車籠僧二人、又安芸入道円源子息將監師^上、兵部大夫入道了円等自宿直參会、
於御墓所作寶篋印多羅尼、光明真言、今日栗原保申次被仰付予、以友阿被仰之、正和度被仰成^{安木入}
道^{彼例也}、幸甚々々、今日安芸入道安堵料内、且廿貫文被進之、今日安芸入道円源、安堵料内五貫文
被進之京進分都合二十五貫文也。小時、安芸入道殿子息將監師上・兵部大夫入道了円等參入云々。
御說法以前於南向常出居被行坊飯、僧衆^{并公達}等着座、安芸禪門并師上・了円等同有座、今日誦
文十二通^{家君、予、安芸入道、外史}各有誦經物

今日吉和栗原公文酒料 二結沙汰進上、追代官

康永四年(1345)三月廿六日

今日安芸入道円源、同子息將監師上、兵部大夫入道了円等參入、各々安堵料事、以予種々御問答之、
及晚合差一献給明日可下向之故也、各々安堵料安芸入道分八十貫文、内當進二十五貫文、残五十五貫文被進請文安堵御教書己下来廿九日可被書下、其以前無日次之由、陰陽師計申故也間件日可被書下安
芸入道己下、明日先可下向、下部一人留置可賜御下文己下之由、申置了。

康永四年三月廿七日

今朝安芸入道下向備後、青侍中開酒三連今日被出之了及盃飯、幸甚々々。

康永四年三月廿九日

癸丑天晴今日依日吉日備後^{□□}安堵御下知書賜之、予書之安芸入道被留置人、扇并新茶少々被志遣

了、予扇五本志安芸入道了。

康永四年四月九日

今日岩崎律師慶祐參入、以予御問答条々申所存又坂町安堵………（略）

御所崎一字分安堵御下文同賜之、件地子於京都可致沙汰之由申之、其外歌島當年請料且十貫文、可致沙汰之由申領状了。

康永四年四月十二日

今日岩崎律師 町安堵料三貫御所崎地子七百二十文進上之、坂町申次五連致沙汰、今五連可有御免由申之、然而為任例、猶可問答也。

康永四年四月廿一日

今日岩崎律師參入明日可下向備州之由申之令差酒給、茶五袋被志遣了、退出之後安芸入道許へ被遣御状等以左近太郎被遣宿了。

康永四年六月十九日

今夕又次郎自備後上洛、三儀公文安堵料且十貫賃進其外未到彼到来被宛御拜賀料足之處^来延弱到□以外也、安芸入道無沙汰歟、如何

康永四年七月十三日

以便宜、自備後栗原保掃部左衛門入道觀心号屋□分安堵料二貫文致沙汰、申次分布二段申次分友阿申沙汰間被遣彼了、式貫文被納了

今夜又令発給、聊輕様令発給幸甚々々

康永四年十月十二日

壬戌、天晴、今朝將監師上參入、綿櫃持參之、安木□□同持參、請文用途已下致沙汰云々。
予方有状申次殘三貫文被沙汰上、幸甚々々、今日將監進上開酒料、鳥目三百疋、蠟燭〔 〕予方蠟^延燭^方被志之、外史□荒面一被志之云々

（中 略）

貞和三年（1347）十一月五日

天晴、今日酉刻許自備後栗原保飛脚到来、是去月廿六日夜号久世次郎悪党等打入安芸入道住宅ニ放火浪籍事也、然而翌日退出之由載状、以外事也。

貞和三年十一月七日

今日自備後江平次上洛、放火浪籍事、守護注進被執進之了。

貞和五年（1348）正月十九日

□孫六度々久世次郎以下に寄合^{候へ}候、様々事内談候之間、廻候不□□覚候、伺京都御意候て候し、□此令申候やらんきやうにも候はて、委細^承候て其様を可存知候、如此御意□□□□には、なにとはねををり候ても□正躰事候、□御事京都事地下一大事此事候、尚々便宜之時者、可有御心得候事候、期後信候、恐々謹言 十月三日直講殿 円源（花押）

□六下向御文委細承候了、抑悪党退治事郎勢をも□計候へ可追出候之處、三谷合戦^中□々和合戦所へは可入給主之由守護方より兼具ニ禁制候之間〔 〕無心本候。

貞和五年正月廿三日

今日向接察大納言宿所給栗原保事為被申也此次參相国第給、次參殿下給、栗原保事被敷申各有御対面云々。

(紙背文書)

路次之間無別事下向仕候之間、返々悦入候兼又雖不珍候、千鳥賊荒卷一^{小数}10令進候、雖無何事候便宜之時は可蒙仰候、又自是可令申候、去五月廿七日より至今日雨不降候之間、今年は又令損亡候事、返々敷存候毎事期面拜之時候、恐々謹言。

七月四日 直講殿 円源(花押)

貞和五年二月二十八日

今朝家君令向接察大納言様四条大納言第給^就食昨日雜訴有沙汰、猶廿日分可勤仕若難義者、無左右難返付栗原保之由有勅定云々御沙汰次第理不尽也、為之如何。

^覚候、^{敷入}候、^{地下}事一旦事にて候へは始終落居勿論事候、就其候ても公事一大事候仍以前委被申候つ適被替進候、物違候て江平次空罷下候へば、寮中被失申候公役をつらへられ候てこそ罷候はんするに一定公役欠候ぬと覚候、返々公私敷入候如沙汰申候、寮務無相違候てこそよく候へきに公役欠如せんと候事、返々無勿昧候、毎事^{當役をこそ被憑申候}に如此候へはなに候へしとも不覚候、相構^{期後信}候、^{恐々謹言}。

御心中察申候、又聊取廷たるやう〔 〕同心候、今日十四日御状同廿三日到来委承候了、當保事尚々驚敷入候、京都も無物沙汰候之間、不及催促候就公私被^恨候へとも一向闊沙汰候間、無力候、沙汰始候は京都沙汰は不可有等閑候也、次此度入道殿御上洛再三被申候様に公役寮中の大事候之間、不願地下機嫌被申候 敷入候 へ

今月十四日御状同廿三日到来、委細承候了當保事、返々敷入候御心中察申候、京都武家沙汰^{此間は候仍不願機嫌}候之間、無力不及催促候、下地事も被察申候、又寮中公役欲及欠如候之間、是又公私敷^{候仍不願機嫌}候、^役公^事も被申

貞和五年五月廿九日

今日自備後栗原保飛脚到来、去十九日左兵衛佐而使被打渡候了云々、幸甚々々。

貞和五年 六月十六日

(中原師躬)
今日自備後状到来、昨夕音儒同道又次郎男上洛也。

貞和六年閏六月二十日

今日兵部入道了円參入、昨夕自^{備後}上洛云々。持參一瓶料百疋及盃飯、又蠟燭并延、千鳥賊三十進上之、又蠟燭十延、千鳥賊二十志予、本意之由遣返事。

貞和五年十月二十日

今日左近太郎自備後上洛、仕人同上洛

栗原保守護大平出羽權守令押領云々

觀応三年(1352)九月二十二日

次令向^三宝院賢俊僧正坊給以人被聞栗原保相原下向之間、被仰彼之由昨日武家沙汰仰^之由云々垂相時分片時 存之由被申之、殊以外候、相原今朝下向候細々見來候委細可被仰候不可有等閑之由有返事云々

貞和五年九月二十四日

今日備後守護代栗原保事申談雜掌子細等在之、自国守護代官昨日上洛、就其土肥失面目之間、自京都被下代官可打渡之由申之了

貞和五年九月二十六日

今日備後守護代与雜掌出逢奉行所、是栗原保事自京都被下代官者可打渡、始終雖為本御代官於今年所務者自京都可被下人云々奉行嚴重公領之様仰含守護代了、神妙々々

栗原保事為申談、欲參三寶院僧正坊之處、未申習之間、賜御一行可持參之趣被示之、此間足有雜繫事、不及出現之間、對面申事不定然而先書進狀了、彼中将与三寶院同腹兄弟也殊細々寄合仁也家君以狀、令向三寶院坊給之處有雜繫事之間、不入見參後日可有來臨之由被答之間被帰了、次令向勤修寺一品第給以前民部權少輔定茂朝臣

3. 安芸入道・兵部大夫・左近氏について

師守記の中の栗原・吉和保等に関係する記事をあげたが、若干内容によって省略をしたところがある。しかし、大略其意をくむことが出来ると思う。

師守記に出てくる人々のうちで安芸入道について、青木茂氏は次のようにいっている。

「安芸氏の出自はわからないけれど、宝土寺文書（尾道）や高知の常通寺の鐘になっている光明寺（尾道）の鐘銘に出てくる橋信吉という人物が安芸入道の後裔であろうともいわれている」と述べられている。安芸入道は栗原保内での経営に主要な役割を果たしているが、しかしながらその実態はよくわからないのである。つぎに安芸入道とたびたび京都にやってくる兵部大夫入道了円についてであるが、身分的に城の主とも思われないので、あくまでも推測として考えてみたい。

因島村上氏の宿老として村上氏を支える宮地氏は、木頃石見守に城を追われるまでは、吉和保鳴鹿城代として吉和保にいたと系図に出てくる。宮地氏の系図をあたってみると、次政「保安三年(1123)越中国宮地荘を賜わり、宮地を以て姓とす」、兵部太郎広義、兵部次郎広俊、兵部太輔弘躬（木頃石見守の為に戦死落城（1423）す、家族は村上氏と因縁あるによって因島に渡る）、大炊助明光、と続くようである。前述の系図をみると、明光以後の大炊助の前には兵部という共通した名称を見ることが出来る。師守記に出てくる兵部大夫も兵部であるという共通性を見ることが出来、他には宮地氏らしい人物もみい出せないのであるが、但嘉吉三年（1443）、高野山にたいする山名時熙の守護請不足米を堺まで送った船の中に「犬島おゝいとのゝ船」の名前がみえ、宮地氏の持ち船と思われる。また因島村上氏のもとで中庄の金蓮寺、八幡社再建の大檀那となっているので、安芸入道にくっついてでてくる人物とも思われませんが考えてみる余地はあるのではないだろうか。

つぎに左近氏であるが、これは直接栗原保や吉和保に関係する人物ではなく、中原家の家使として、各地の大炊寮領にいらしているのであるが、兵庫北関入船納帳のなかに瀬戸田から鉄を運んだ船の持ち主として左近二郎（同一人物ではない）の名がみえ、また、因島金蓮寺の瓦葺きかえをした中に、中庄御代官幡利子息又三郎預左近三良と出てくるので、左近氏の多くは酒^{あきない}＝商に関与していたのではないかと思う。

4. 師守記の内容

師守記の栗原保や吉和保に関する記事は前述のように、暦応二年(1399)から貞治六年(1362)まで載っている。この時代は足利尊氏が建武政府にそむいて自己の政権を確立する時代であり、各地で南朝方と北朝方との争いがあったし、後には弟の直義、息子の直冬との間が不仲になり、三つどもえの争乱の時代になる時でもある。そしてこの時代中原氏は北朝の大外記として京都にいて、大炊寮領の管理をしていたのである。

安芸入道は栗原保内において八十貫文の安堵料を払って経営していたのであり、度々息子の将監師上と兵部大夫をともしない上京していたことがわかる。

岩崎律師慶祐は御所崎内の地子として七百二十文を払い、歌島の請料として十貫文の安堵料を支払っているのである。

御所崎は尾道の中でも重要な港としての地位を占めるのであり、この時代は大炊寮の管理下にあった。高野山太田庄の倉敷地であった尾道は、太田庄の物資の積み出し港でもあり、活況を呈していたものと思われる。

岩崎律師が御所崎内を占めて地子を払っていたのは、向いの歌島の大炊寮領を請け負っていたために物資の運送上必要なためであったと思われる。御所というのは大炊寮との関連でつけられた名前であると思われ、尾道に政所があったとすれば、青木茂氏のいうように、御所崎内にあったと考えられるのではないだろうか。

貞和三年(1347)⁽⁶⁾になると久世次郎等が栗原保内に入って、安芸入道の住宅をやいたりして、すぐに京都に注進がいて、守護にかけあっているようである。貞和五年(1348)になっても、久世次郎等の侵入はやまず、孫六が度々久世次郎等にかけているが、なかなか思うにまかせないようである。そこで中原氏は中央工作をおこなっているが思うにまかせず、貞和五年(1349)五月になってようやく、足利直冬の力によって栗原保を回復しているのである。しかしそれもつかの間、同年の十月には、左近太郎の報告により、大平出羽権守の押領を知るのである。

此時には三宝院賢俊の力をかりて、相原氏が三宝院の命をうけて、栗原保内をこまごまと見て、三宝院に報告し、その結果守護代が京都に呼ばれて、奉行から公領に侵入しないようにと厳しくいわたされているのである。この文章中に土肥がその面目を失ったとあり、青木氏は土肥はどのような人物かわからないと新修尾道市史に書いているが、私は素直に考えて、小早川氏でよいと思っている。

其の後、家君(師茂)は栗原保のことで三宝院をたずねたけれど、三宝院の都合で会えず、後日またたずねるといふことで文章は終わっている。

大炊寮領はその後武士の侵入によって有名無実となり、御所崎も足利直冬や山名氏の勢力下に入っていくことになる。

(注)

(1) 令制における官職である。大政官の少納言の下にあって奏文の作成、先例の考勘、公事儀式の奉行などをつかさどり、大外記、少外記各2人でその下に史生10人が属した。

大外記は清原、中原氏の世襲である。

- (2) 『師守記』第11巻 藤井貞文、小林花子編 続群書類従完成会
- (3) 雑穀、諸司の倉糧のことをつかさどり、中原氏の世襲である。
- (4) 『鞆』市街地発掘調査報告 福山市教委 1980 『尾道』市街地発掘調査 1977 1978 1979 草戸千軒町遺跡調査研究所
- (5) 網野善彦 『無縁・公界・楽』(平凡社)、『日本中世の民衆像』(岩波新書)、他
 笠松宏至 「仏物・僧物・人物」(『思想』670)、石井 進「都市鎌倉における地獄の風景」
 (『御家人制度の研究』吉川弘文館)、井上鋭夫『山の民・川の民』における雲ノ上公伝
 説の解説等、横井 清『中世民衆の生活文化』(東大出版会)、その他に『一揆史入門』、
 視覚や聴覚に関する研究も多く出ていて注目されている。

(福山市民図書館)

- (編集者注) 引用史料の中で“處→処、新→料”等、便宜上漢字を改めたところもある
 注意されたい。

続備南中世山城跡の現状 (No. 3)

福山ユースドマップクラブの

中世山城調査報告

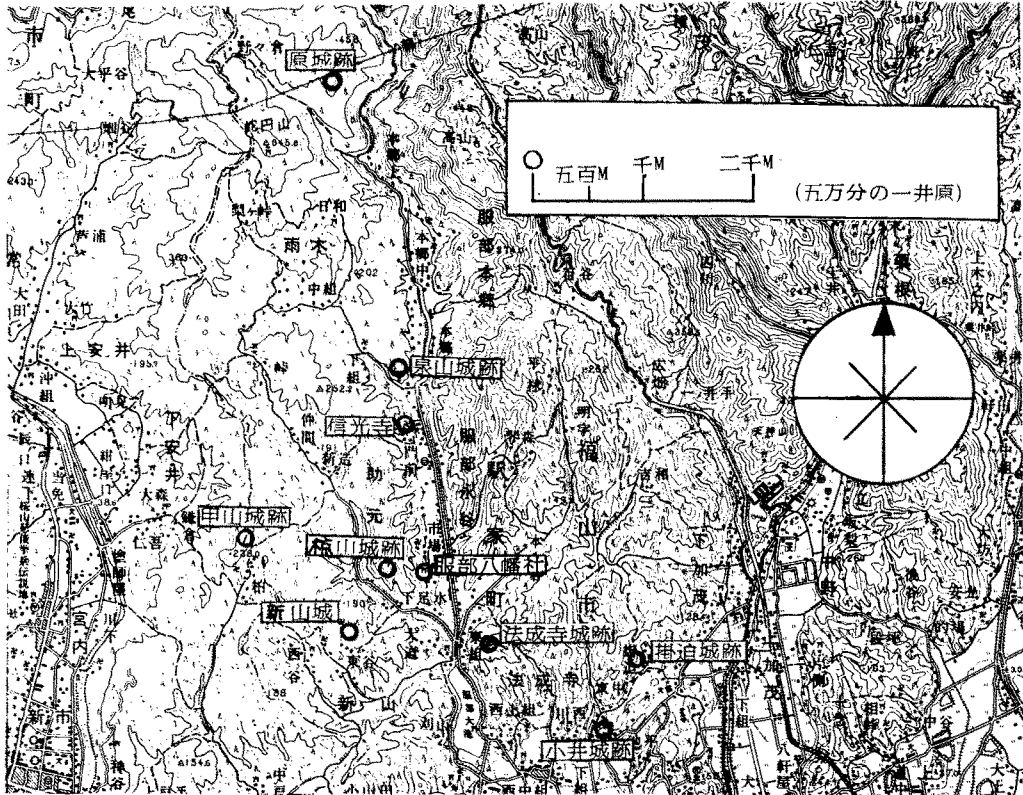
田口義之

9. 掛迫城跡

(所在地) 広島県福山市駅家町大字法成寺字掛迫

☒位置☒ 神辺平野の北側には吉備高原の南縁をなす丘陵地帯が広がっているが、その一角、福山市駅家町大字法成寺の比高40m余の低丘陵上に残る山城跡が当掛迫城跡である。

この地は中世最も生産力の高かった耕地である「谷田(迫田)」地帯で、備南の政治の中心であった国府(現府中市府川町)にも近く、中世の在地領主(国人、土豪)達の本拠地としては絶好の場所である。



第①図 駅家町北部山城分布図

☒現状☒ 城は東北から西南に延びた比高40m前後の丘陵を利用して築かれたもので「山城」というよりは「丘城」に類するものである。

現在、城の遺構として7ケの平坦地(郭)と2ケの空堀を認めることができる。

城の構造は尾根を約140mの間隔をおいて築かれた2ケの空堀(空堀①②)によって城域を画し、その間に3ケの主要郭(①②③郭)を並べ、更に東西に張り出した支尾根上にも4ケの腰郭状の郭を築いた。いわゆる放射状連郭式山城である。(折込第②図)

①郭は山頂に所在する40m×18mの楕円形の平坦地で、当城跡最大の規模を持ち、城の中心をなす郭であったと思われる。猶、現在この郭には「宮周防守」と刻まれた石碑が建立されている、いつ頃から存在したのか、又、その由来等不明であるが、現在地元の人によって「稻荷さん」として祭られている。②郭、③郭は①郭の西南に4~5mの高低差をもって順次築かれた三角形の平坦地で、規模は各々24m×12m、31m×16mを計る。④郭は東支尾根上の18m×7mの半円形の平坦地で①郭との高低差は約4mである。⑤、⑥、⑦郭は西支尾根上の平坦地で各々16m×15m、10m×7m、5m×15mの規模を持っている、この内、⑤郭は①郭との高低差約5mでその南端は小径状となって②郭北西端につながっている。

空堀①は①郭北東直下に存在し、巾5m、深さ1mでその外側は土塁状をなしている。空堀②は③郭の西南20m下方に所在し、巾5.5m、深さ1.5mを計り、現在底は道路及び水路として利用されている。

これら城の遺構が残る尾根の東西両斜面は絶壁状に麓に落ち込み登はんは容易でない。又、現在、城跡の西側谷底には2ケのタメ池が存在するが、もし、これらの池の起源が中世にまでさかのぼるならば城の外堀としての役割を持っていたものと思われる。

以上、まとめてみると、当城は低丘陵上に残る城跡としては良く原型を保ち、又、小規模ではあるが整った構造を持った山城であるといえる。

猶、この城の①郭には「金の茶釜」が埋まっているとの伝承があり、往年ここを掘った人の話によると焼米や瓦片が出土したという。

☒歴史的考察☒ 『備後古城記』等、江戸時代の記録によると 当城には宮治部太輔勝国(勝岡とも)という者が居城したという。又、『西備名区』によれば宮勝国の在城年代は戦国時代の天文から永禄年間(1532~69)で元亀元年(1570)、尼子義久に味方したため 毛利方の小早川隆景、山名忠興によって攻撃され落城したという、猶、落城に関しては元亀元年説の他、天文20年(1551)説もあったようで(西備名区)、この場合は当時尼子方として毛利氏に敵対していた宮光音の本拠志川滝山城(福山市加茂町北山)の支城としての役割を果たしたと伝える(同書)。

城主宮勝国の素性は他に徴すべき史料がなく、備後最大の豪族である宮氏の一族ということのほか不明である。

掛迫城の南西800mのところには小井城跡が存在し、城主として官兵部太輔勝信の名を伝えている。この人物は天文10年(1541)2月24日付宮実信感状(岡山県古文書集第4輯所収「平川家文書」)に見える「法成寺兵部大夫」と同一人物と思われ、又、勝信、勝国の名乗りに類似性が認められ、その居城が接近していること等から この両人は親子、或は兄弟といった関係にあったのでは

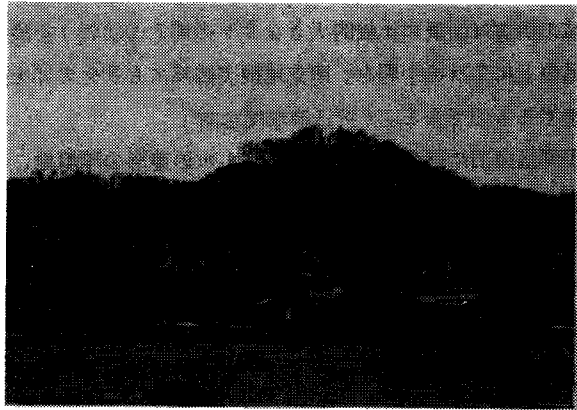
なかろうか。小井城は城というよりは居館と呼んだ方が良いような構造であるから、この場合、その軍事的拠点（詰城）として掛迫城が築かれたのであろう。又、「天文日記」（『石山本願寺日記』所収）の記述（注①）や先述の宮実信感状、更に『備後国福山御領分古城記』（福山城鏡櫓文書館蔵）安那郡東法成寺村の条に

「宮兵部大夫勝信

宮代々の居城勝渡城同時ニ戦死子孫断絶」

とあること等から推定するとこの法成寺の地には宮氏の庶流（宮法成寺氏）が本拠を置き、居館として小井城を、その軍事的拠点として掛迫城を築いて、この附近一帯を支配していたものと思われる。

「井原文書」（広島県史古代中世資料編Ⅴ所収）によると天文19年（1550）8月28日、この地で大内氏の軍勢が動き井原民部丞が敵の首一ツを取っている。当時、大内氏の敵は尼子氏であり、当掛迫城主、小井城主は尼子方であったと伝わる（西備名区）のであるから、これは大内氏の宮法成寺氏攻撃を示すものであろう。この後、弘治3年（1557）



写真①

頃には法成寺の東隣加茂の地は毛利氏の有力な部将である神辺城主杉原盛重の支配下に入っている（備陽六郡志所収「三吉鼓家文書」）ので先の『西備名区』の記事を考え合せるとこの頃には城主宮氏も滅亡していたものと思われる。そして、当掛迫城もその存在意味を失ない廃城になったものと推定される。すなわち、当城は在地領主の居館としての性格を持った山城であったと思われるのである。

（注①）「天文日記」天文6年12月14日、同7年8月13日、同年11月5日、天文8年12月11日、同年同月26日条などに尼子方として宮上総介、宮上野介等と共に宮法成寺尾張守の名が見える。

10. 泉山城跡

（所在地）広島県福山市駅家町大字服部本郷字雨木

☒位置☒ 福山市の中心部から北西へ約10mのところの芦田川の支流服部川によって開析された服部の谷が開けている。当泉山城跡はこの南北に細長い谷の丁度中程に位置する標高154mの山城跡である。（第①図参照）

服部は古くより開けた地で古墳も多く存在し、古代律令制下の郷『服部郷』に比定されている。中世に於ても、最も生産力の安定していた、いわゆる「谷田（迫田）」地帯で、当城跡の北方3Kに

は原城、南方2ヶには掠山城、又、谷の南出口付近には新山城、大嶮城（法成寺城）と合計5ヶの山城が築かれており栄えた地であることがわかる。その他、この地は古代から中世にかけて備後の政治の中心であった国府（現府中市府川町）にも近く、谷の南出口至近には旧山陽道が通る等、山間要害の地であることも考慮すると、中世武士団が本拠を構える地としては好適な条件を備えたところである。

☒ **現状** ☒ 当城跡は服部谷の西北方にそびえる標高545mの蛇円山から東南に延びた尾根の先端を利用して築かれた山城で麓からの比高は70～80mを計り、現在遺構として12ヶの平坦地(郭)と2条の空堀を認めることができる。

城の構造は山頂に比較的大きな2ヶの郭(①②郭)を設け、更に山頂から東、東南、西南に延びた支尾根上に7ヶの小郭を、南支尾根先端部にも3ヶの郭を配したもので、いわゆる放射状連郭式山城に類するものである。(折込第③図参照)

①郭は山頂に所在する42m×21mの菱形の平坦地、②郭はその南に高低差2mで接した38m×17mの長方形の平坦地で、その北西端は泉山林道によって破戒され、南端にはテレビアンテナが建設されている。この両郭はその規模、及び位置から見て城の中心をなした郭と考えられる。猶、現在この両郭は巾7m程の緩斜面によって結ばれているが、これは林道工事によって破戒された為と考えられ、元々は明確な段差を持っていたものと推定される。

③郭は①郭の東北に3m切下げて築かれた8m×7mの半円形の平坦地、④郭は②郭の東南5m下方に存在する10m×9mの三角形の平坦地、⑤郭は更に1m低く築かれた10m×4mの三角形の平坦地、⑥、⑦、⑧、⑨郭は②郭の西南に高低差2～5mで順次削り出しによって築かれた平坦地で規模は各々7m×8m、12m×10m、7m×5m、5m×5mを計る。これら③から⑨の各郭はその位置、規模から見て主郭(①②郭)に対する腰郭としての性格を持っていたものと推定される。

⑩郭は②郭の南方約100m下に存在する半円形の平坦地で17m×12mの規模を持ち、麓からの比高は約30mである。⑪、⑫郭は⑨郭の南に2～4mの高低差で接した各々14m×12m、20m×10mの平坦地で この内⑫郭には土居荒神社が祭られている。

空堀は⑤郭の20m下方に存在し、尾根に直交した、いわゆる「堀切り」で巾5～4m、深さ1～2mを計り、岩盤を削って築かれている。又、空堀はその役割から考えて①郭の北方尾根続きにも存在したはずであるが、現状ではこの部分は林道によって破戒されていて、それを確認することはできない。

その他、城の南麓は「土居」と呼ばれており、泉山城に関する居館跡の存在が予想される。

猶、城の東、西、南斜面は急傾斜をなし、登はんは容易でない。

以上、この城は小規模ではあるが、その遺構、関連地名等を良好に残した中世山城といえる。

☒ **歴史的考察** ☒ 当城に居城したのは『備後古城記』によれば宮常陸介元清(信清とも)という者が天文年中(1532～54)、中島村(福山市駅家町中島)の石崎信実と戦い、宮氏は敗死して城は焼払われたという。又、『西備名区』によると、当城は鎌倉時代の初め中国五ヶ国の守護としてこの地に下向した関東武士土肥実平によって築城され、その後土肥氏の庶流が代々居城し、室町時代には宮氏

の居城となったという。猶、同書によれば当城の宮氏は天文3年(1534)、毛利元就によって攻め滅されたと伝える。

土肥実平築城説にはわかには信じ難いが、室町時代、宮氏がこの地方一帯に勢力を持っていたのは事実である。宮氏は小野宮左大臣(藤原実頼)の後裔と伝えられ、南北朝時代、宮兼信、氏信父子が足利氏に味方して大きく勢力を伸ばし、この時代には備後最大の豪族に成長していた。その惣領家は新市亀寿山城(芦品郡新市町)を本拠とした宮氏と思われ、一族には比婆郡東城町久代の久代宮氏、同小奴可の小奴可宮氏、神石郡北部の宮氏、又、深安郡北部に根を下した宮氏等があった。

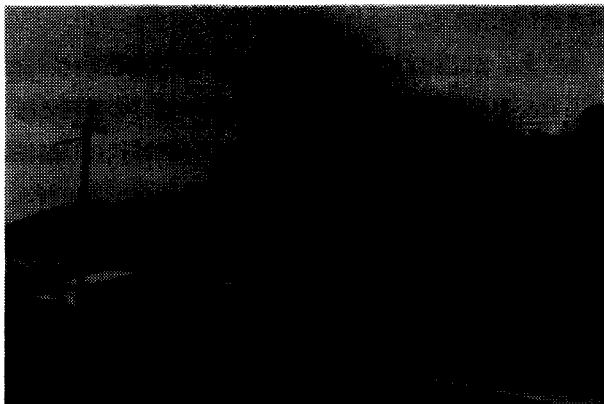
宮氏と服部との結びつきは室町時代初期にさかのぼるようで『山内首藤家文書』83号によると永15年(1408)頃、宮次郎右衛門尉氏兼という者がこの地を領している。宮下野守元盛は永享10年(1438)正月16日、当城東方1.5Kの平林の地を中興寺(新市町宮内)に寄附している。(広島県史古代中世資料編Ⅴ所収「中戸文書」)。これら宮氏兼や宮元盛と当城の宮氏との系譜上のつながりは明らかでないが『西備名区』は当城の宮氏は亀寿山城宮氏の分れであると伝えている。前述の宮氏兼は亀寿山城主宮兼信の子孫と推定され(広島県史古代中世資料編Ⅴ所収「田総文書」7号)、宮元盛も『福山志料』等によれば亀寿山城主であったと伝えられているのであるから、亀寿山城宮氏の勢力がこの地に及んでいたのは確かであり、これは真実を伝えるものであろう。つまり、当城の宮氏は亀寿山城宮氏の庶家であったと思われるのである。

『芦品郡志』によると宮元清の兄は宮常陸守信光といい、当城の南400mの助元(福山市駅家町助元)の地に菩提寺として禅宗の信光寺を建立したという、又、蛇円山中に鎮座していた八幡社を現在の服部永谷の地に移したのも信光であったと伝えている。その他、服部谷の他の山城、原城、椋山城は共に泉山城の支城であったと伝えている(岡田逸一『服部の歴史』等)。これらのことから推定すると、当城の宮氏は信仰面では八幡社を氏神として崇敬し、信光寺を菩提寺として建立する等してその支配の精神的な拠所とし、又、政治的軍事的には支城として原、椋山の両城を配して、この谷を国人領主的性格で支配していたものと思われる。

『西備名区』によると 江戸時代、産社八幡社の祭礼には「公聞」という役があり、これは泉山城主宮常陸介の古格を伝えたものといわれ その「当日には神馬の外、公聞の乗馬一疋を」出し、その行列には「弓、鉾、鎗、長刀、陣刀、鉄砲等の武器」を揃え、「供御事諸用何事も公聞の下知する事」に違背する者はなかったという。この公聞なる役名は庄園公領制下の庄官、「公文(くもん)」職の伝統を引継いだものに相違なく、この伝えが正しいとするならば、宮氏はこの地を支配するにあたり、この「公文職」を重要な足掛りとして勢力を伸ばしていったものと思われる。

しかし、当城の宮氏が当地を国人領主的に支配したといっても それは所詮惣領家亀寿山城宮氏の掣肘の範囲内であって、一面では惣領家の重臣としての性格を持っていたものと思われる。そして、そのことが当城の宮氏が没落する原因となったものと思われる。すなわち、戦国時代、亀寿山城宮氏は有力な尼子方として行動しており、尼子氏と対立する大内氏は 天文3年(1534)、毛利元就に命じて亀寿山城を攻撃させたのである。宮氏もよく防いだのであるが 当主宮下野入道直信は病死し、嫡子若狭守は幼少で同年10月には降伏している(『福山市史』上巻参照)。『西備名区』によると、この時宮元清は亀寿山城東方の守りとして当城に籠城し、毛利勢の来攻をまっ先に受け、よく戦った

が元清は討死（逃走したとも）、城は焼
払われたという。当時、このように庶家
が惣領家の重臣としての性格を持ち、そ
の居城は惣領家の居城に対して支城とし
ての役割を果たした、といった例は、安芸
の毛利、小早川氏、備後の山内首藤氏等
の著名な例に徴すまでもなく、普遍的な
形態であるから、これはほぼ真実を伝え
たものであろう。つまり、当城の宮氏は
主家の亀寿山城宮氏の重臣として その
一翼をにない、戦乱の中でその運命を共
にしたものと推定される。猶、『備後古



（写真② 泉山城跡 東北より望む）

城記』に伝える中島村石崎信実との合戦云々は この毛利勢との対決の中で近在の国人士豪の内、宮
氏に反して毛利方としてこの合戦に参加した者もあったことを示しているのではなかろうか（通常、
敵地に攻め入る場合、敵に接した者がその先鋒を勤める例が多く、石崎信実は毛利軍の先鋒として
泉山城に攻め寄せ、そのことがこのように伝えられたのであろう）。

次に宮氏没落後の当城についてであるが 『木梨先祖由来書』（新修尾道市史Ⅰ所収）によると
天文12年（1543）、尾道市木梨鷲尾山城主木梨杉原氏の一族木梨平右衛門盛兼（後伊賀守）とい
う者が 大内氏に一味して、尼子氏の為に没落した木梨杉原氏を再興した功により、大内義隆より服
部5ヶ村を給わって甘木村（雨木の村）勢山城（当城のこと）に居城したという。『備後古城記』
服部本郷村の条に

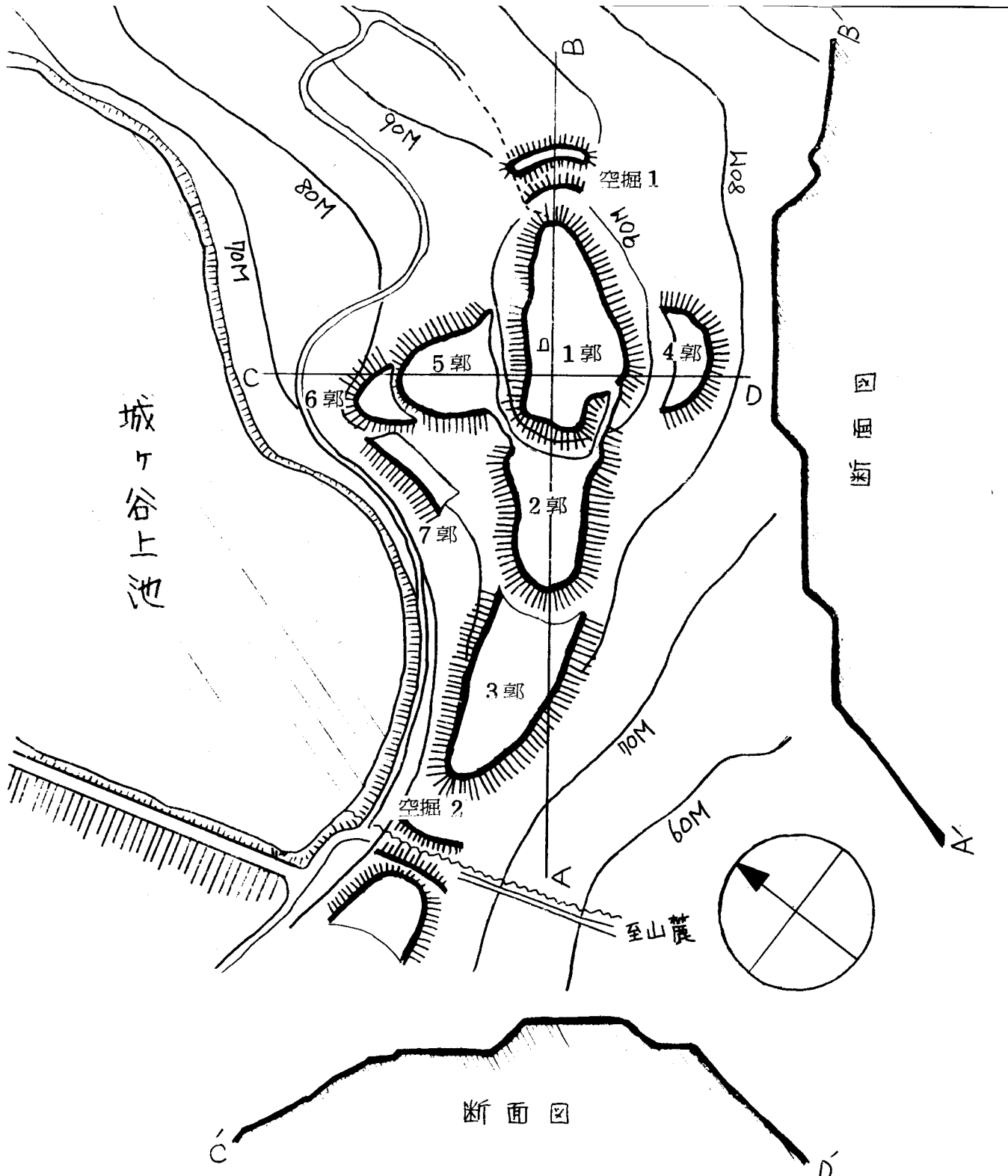
「勢山城 杉原伊賀守盛兼 天文年中」とあるのはこのことを指しているものと思われる（ちな
みに当城跡は雨木と服部本郷の旧村境上に位置し、各種の地誌には雨木村泉山城、服部本郷村勢山城
と別々に記録されているが これは同じ城を指しているのである）。

おそらく、当城は宮氏没落後、大内氏の手に戻り、その後木梨氏に恩賞として宛行れたのであろう。
盛兼は大内氏、後には毛利氏に属して軍功があったが、その没後は子息平右衛門が相続したようで
『木梨先祖由来書』に

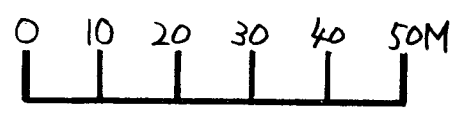
「服部勢山の城主木梨伊賀守盛兼、子平右衛門内膳と申して二人有、即伊賀守家督を平右衛門相続
して兄弟共に勢山の麓に住す、今に至て、所の者共土居と申して、家敷跡有」

とある。

この後、当城の木梨氏は本家の鷲尾山城木梨氏と共に毛利氏麾下の国衆として活躍したものと思わ
れるが、前掲書によると文禄3年（1594）、突然その知行を没収され、浪人したという。その理由
は不明であるが、天正14、5年（1586、7）以降、毛利氏の権力は中央政権をバックとして一段
と強化されており、今まで反動的な姿勢を見せていた備後の国衆を容赦なく弾圧している。（注1）
その結果、木梨本家、古志氏（本拠福山市本郷町）は取潰され、久代宮氏や神辺城主杉原氏等は知行
を大幅に減らされた上 他国に移されている。おそらく、このような動きの中で当城主の木梨氏も本



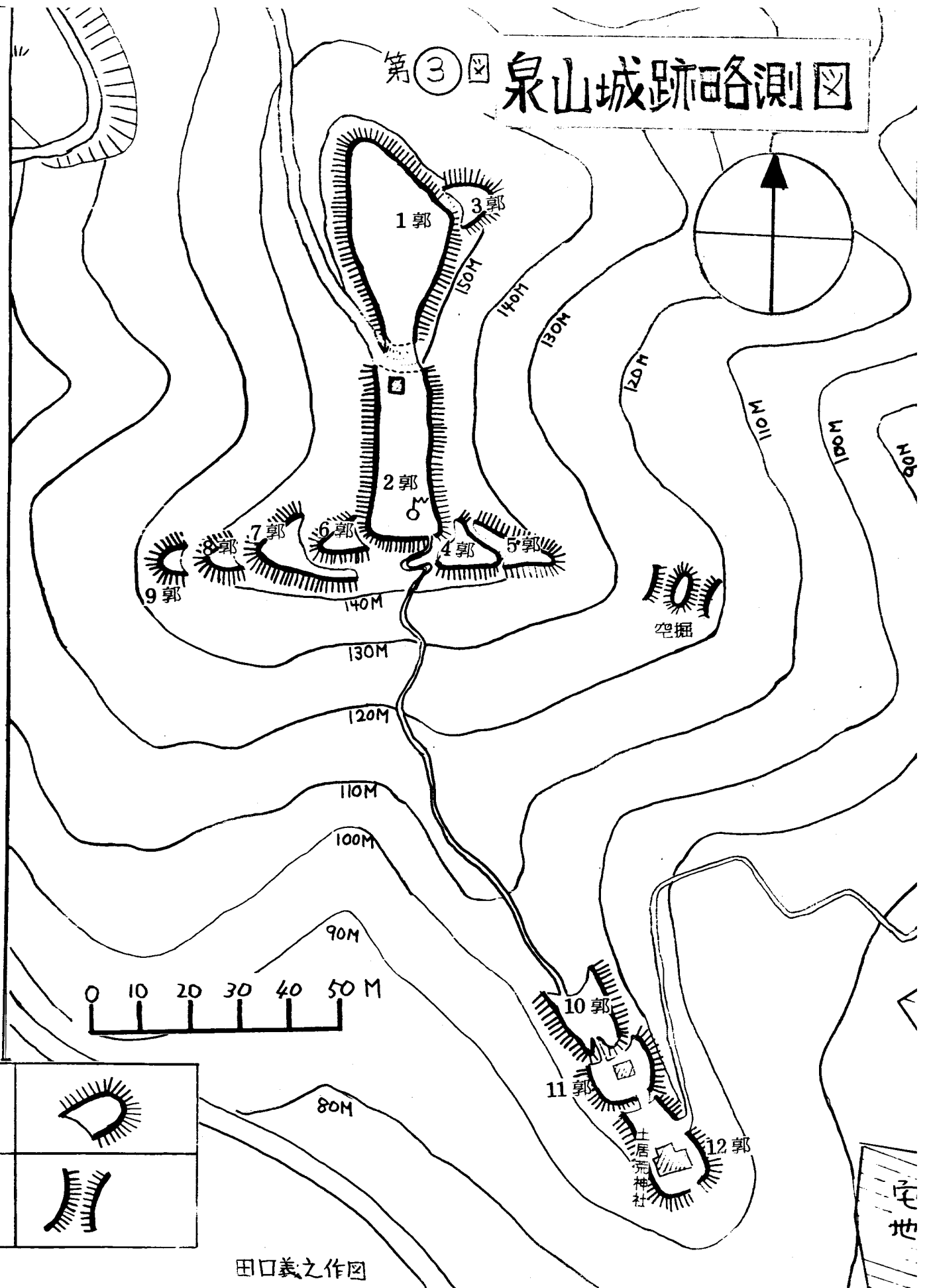
掛迫城跡略測図 第②図



田口義之作図

凡	郭	
例	空堀	

第③図 泉山城跡略測図



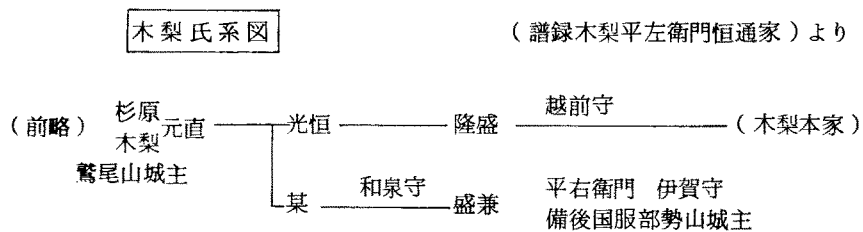
田口義之作図

宅地

家と運命を共にしたのであろう。猶、木梨平右衛門はその後「兄弟共に浪人仕、後ハ尾道、府中辺に幽蔽なる体にて罷有」ったという（木梨先祖由来書）。

以上、やや散漫な記述となったが まとめると、当泉山城は室町から戦国期にかけて服部の地を領した、宮氏、木梨杉原氏の一族によって その居城として使用され、戦国末期木梨氏が没落した後、廃城になったものと思われる。

☒ 参考 ☒



（注①） 松浦義則 「戦国末期備後神辺城周辺における毛利氏支配の確立と備南国人衆の動向」
（「芸備地方史研究」 110、111 合併号）

猶、福山ユースドマップクラブとは現備陽史探訪の会の前身である。（為念）

（城郭研究部会部会長）

二子山城物語

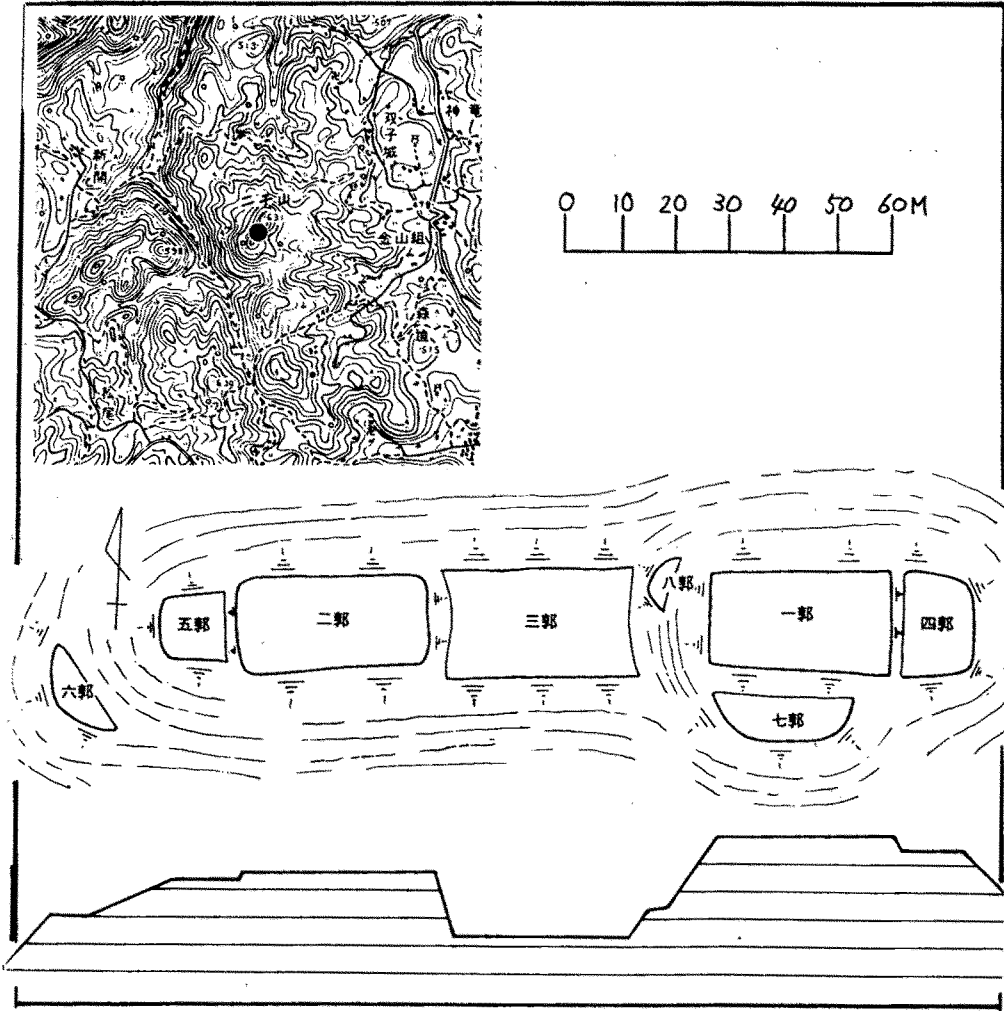
武島種一

神石町内に中世の山城跡とされているものが17あり、内14が調査を完了しています。

ただ、何者が城主であったかは 確実視されるものと、そうでないものがありますが、言えることは大部分の城は備後の豪族宮氏の一族、又はその支配下にある者が住んでいたようです。

それぞれの城の興亡は、御多分に洩れず尼子と毛利氏の関係する諸々の合戦に参加した機様が伝えられています。

今回はその中で、子孫が萩藩へ仕えたと思われる 神石町永野にある二子山城について述べて見たいと思います。



二子山城略測図（神石町山城分布調査書1983より）

二子山城跡の位置、ならびに本丸を中心にした略測図は別表の通りですが天下の名勝帝釈峽神竜湖畔犬瀬より500mほど上った所にあり、近くに帝釈峽観音堂洞窟遺跡があります。

城主横山氏は武蔵七党にして武蔵国多摩郡横山より起っています。横山氏は小野姓にして姝子の後裔とされています。

初代城主とされている横山権頭時広は鎌倉殿より武州横山の庄、並に淡州(淡路島)を賜り、又備中にも所領あり、神石郡永野も領していたようです。

時広の男左馬允時兼、和田合戦に参加するも、敗れて備中を経て備後国長野村二子山城主とあります(「神石郡誌」「西備名区」)。

ところが、神石郡誌によると横山経時、時広、時兼、重兼を経て、寛元年中、山城国北嵯峨より横山判官重忠来り威を四隣に張るとあります。

神石町内に重忠の末裔と名乗る家があり、この系図によりますと、時広、時兼等はなく重忠が初代の城主となっており、菩提寺法光寺(神石町永野)の過去帖によると、栄興院殿霜峯義剣大居士兩児山曾祖重忠公 寛元四年三月朔日に没していますが、初代が来て2～3年内に四隣に威を張るといふのはどうかと思いますが、これらを年代から見ますと和田合戦は1213年ですから、重忠が来たとする寛元は1243～1247年ですので「西備名区」による横山権頭時広か横山右馬允時兼を初代とするのが正しいように思われます。

重忠は山城国より来たとあることからしますと、同族(姓)ではあっても流れが異なるのではないのでしょうか。そこらがどう交替をしたのか不明です。

重忠より5代目に当る、城主横山兵部大夫忠義延文3年(1358)、備中天竺上野介攻めよせたるもこれを撃退し、追撃せるも討死したとあり、この合戦で討死した将士を合葬し八つの塚とするによって「八塚」といい、この戦を八塚合戦という(「神石郡誌」とあり、この塚の上には五輪塔がありますがこの合戦の時代とこの塚をつくった時代はどちらも年代的に相違があるのではないかと考えられます。

戦後盜堀が行なわれ、刀剣類が出たという話もあります。

忠義の室に子なく、悲歎して、薙髪しその祖重忠より伝える守本尊虚空蔵菩薩を奉安し、二子山麓に住庵、夫の菩提をとむらえり(「神石郡誌」と、これは、二子山城跡略測図の6郭に尼寺ありしという伝承があり、是が、現在ある曹洞宗法光寺の起源となったようです。

城主は、重忠以来9代義国(延徳元年9月25日没)まで続いて(法光寺過去帖)いますが10代義隆は神石町草木榎原山に城を築き、これに移り天文15年7月没す、とありますが神石郡誌によると天文22年毛利元就が比婆郡西城町の大富山城を攻めた時城主宮氏の応援にいったとあるのはなんと理解できない歴史の面白いところです。

この義隆は、何故二子山城から榎原山城に移ったのか、子隆国は天文8年沼隈郡津之郷村小森城に移っていますが、横山河内守義隆一代で榎原山城は終わったようです、が(これは義隆以降の戒名による)実際はどんな変遷があったのか今後研究して見たいものです。

萩藩に二子山城主の子孫と思われる横山氏があり、禄高450石を給されていますが、唯係図が小野姝子より二子山城主とされる時広、時兼を見ることができることからして備後横山氏は嫡流である

ことが分りますが、時兼以後の系図が不詳です。理由は毛利元就の曾孫秀就の上覧に差出したが返却されざる由による（萩藩諸家系譜）、とあります。二子山城主のどの系列とどうつながるのか判明しませんが、つながる確実性は高いといわれています。

義隆が榎原山城へ移った後へ官左衛門尉元安が入っていますが、横山氏が最初備中より入って来て住んだのが和田という所で、面白いことにここは、宮氏が城主であった黒岩城の出口であることは、歴史に現れないいろいろのことがあったのではないかと思います。

いろいろと二子山城に関する話をつなぎ合せただけのことになり、参考価値の低い結果となりましたがこれは私の勉強不足の為で今後精出して町内の山城物語を調査研究していいものを報告したいと思います。

（ 神石町文化財保護委員長 ）

三原史跡めぐり

“失われた^{もの}遺跡への哀愁・古を偲ぶ^{いとしえ}”

末 森 清

備陽史探訪の会に入会し、多くの方々と史跡めぐりをして勉強するうちに、自分の近くに色々と多くの遺跡がある事に気がつく。それらはけっして有名なものでなく古くから伝わり、親しまれそしていつか失われていったものが数多くある。地名もそうだし、野仏、石標、小さな城跡、峠、古道、並木、町並、等々きりが無い。これら失われたもの、くちていきつゝあるものをもう一度誌上に出してみたいと考え自分なりの「三原史跡めぐり」として「失われた^{もの}遺跡への哀愁・古を偲ぶ^{いとしえ}」という題にして文を作ってみた。その始めが「仏ヶ峠」つまりこの地、芸備国境地であると同時に自分の住んでいる団地新倉ハイツの登り口^(入)でもある。自分の家、団地の玄関口に当る所にある今は忘れられた地名である仏ヶ峠をスタート台としていつ終るか分らぬ自分流の遺跡探訪をしてみたいと思っている。自分が朝夕必ず通るこの「仏ヶ峠」を中心に西に東に足をはこんで歴史や遺跡を学んでいきたい。

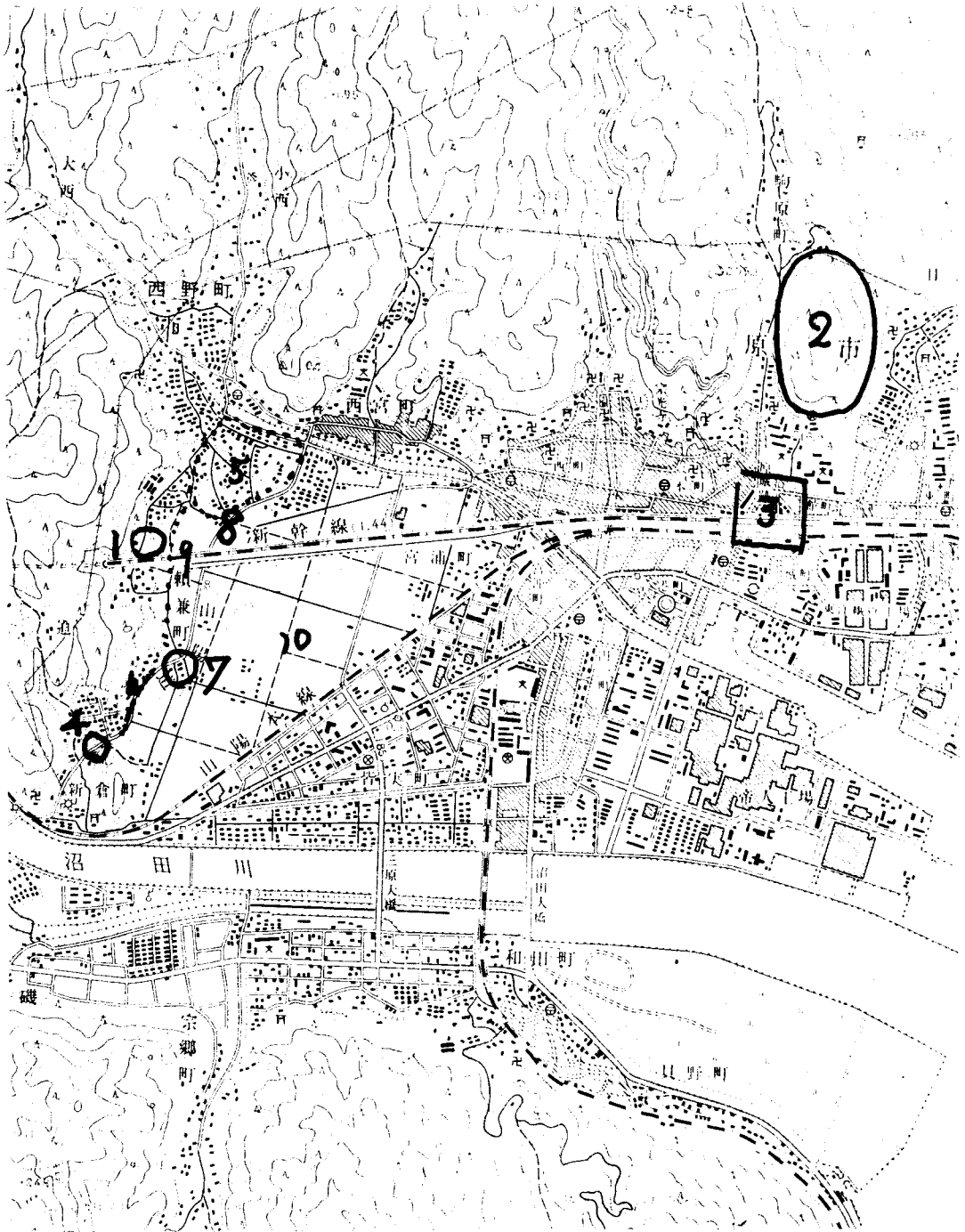
その1 山陽街道に沿って

● 頼兼城跡 「頼山陽先生遠祖の地」



三原市頼兼町に小早川時代（室町後期戦国時代）の城跡がある。今から436年前の天文16年（1547）城主であった岡崎十郎左衛門頼兼は、小早川隆景によって亡ぼされ廃城となったと言われる。城跡は三原平野の西方（三原駅「三原城跡」より約2キロメートルの所）にあり、通称「三原富士」と呼ばれる頼兼山の山麓にあり、山すそより岬（舌状）の様な地形の台地になっている所にある。この附近の田畑はうめられ人家が建ちこんでいるが、城跡は小さな舌状の丘になっており、上部は畑になっており、その廻りの崖は、竹や雑木が繁り城跡らしい面影をわずかに残している。今、城跡には昭和27年三原市によって建てられた石碑があり、表面には「頼山陽先生遠祖頼兼城跡」、裏面には「城主、岡崎十郎左衛門頼兼天正年間故ありて廃せられ子孫永く此地方に住し後竹原に移る。山陽先生は、竹原頼五世春水の子也」と記されている。この頼兼城跡に調査の手が入ったのは、山陽新幹線の橋構が城跡の一部にかゝり、取りこわされるため、三原市教育委員会によって、城跡一帯を調査し

の橋構が城跡の一部にかゝり、取りこわされるため、三原市教育委員会によって、城跡一帯を調査し



1. 頼兼城跡 2. 桜山城跡 3. 三原城跡
 4. 仏ヶ峠(芸備国境地) 5. 頼兼新田一帯(1622千拓)
 6. とうのはま 7. 舟山(神功皇后伝説の地)
 8. 山陽街道(頼兼封疆(堤防)) 9. 横山新田(1644千拓)
 10. 宮沖新田一帯(1700千拓)

た。その結果、城に使用された石垣、建物の遺構、堀（空堀）等の跡は、確認出来なかったとの事である。この城跡にまつわる言い伝えは次の様に語り続けている。

① 地元の語り伝え

「頼兼城悲話」

昔、岡崎十郎左衛門頼兼という士が木梨の郷（現西野町頼兼町一帯・西野町は以前木梨の郷と呼ばれていた）に城を築いていた。

十郎左衛門は、小早川家に属しており、小早川隆景が備後神辺城を攻める時、十郎左衛門にも出陣する様に命令したが、自分の妻と神辺城主の妻とは姉妹であり、思いなやんだ末、命令にそむき出陣しなかった。隆景は大変立腹して、神辺城攻撃の帰りに頼兼城を攻めた。十郎左衛門以下75名、城にたてこもり戦ったかきもなく破れ一族全員自害し城に火をつけ亡んだ。城主十郎左衛門は、隆景が、神辺城より帰り糸崎へ陣をはったと聞き自分の妻を宇都戸の城主丹下氏の元へ帰した。身ごもっていた妻は丹下氏の家で男子を生みその子は成長して、五郎左衛門と名乗った。

五郎左衛門は、丹下氏が没落したため西野村へ帰り世をはきり、姓を岡本と改めて鍛冶屋を営んでいた。その後子孫は代々続いている。頼山陽の祖先は、この岡崎家から分家し竹原に出たと言われている。頼兼の「頼」という字をとって姓を「岡崎」から「頼」にかえたと言われる。そんな事から頼山陽は度々西野村に来たと言われる。

現西野町大西にある辻堂の柱には頼山陽が梅観をした時、らくがきをした文字（詩文）が残っている。

（唯し今は消えて読めない）

らくがきの詩文は辻堂の横に記念として石碑にきざんである。

以上所々に地元の人たちより伝えられた話である。

② 頼兼城を記した文献について

頼兼城跡が文献に出てくるのは次の様な古文書書物があるので記しておく。（頼兼城跡調査書より）

●文化11年（1814）

「国郡志編集御用諸品書出」西野村 古城跡として記述

●文政2年（1819）

「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳」御調郡西野村
古城跡として記述（内容は文化11年と同じ）

●文政3年（1820）

「芸備通志」巻百 備後国御調郡6 城虚として記述

●大正13年

「広島県史」第3編 頼兼城として記述

●大正14年

「御調郡史」沢井常四郎著 岡崎十郎左衛門の記述

●昭和42年

「神辺町史」前巻 杉原忠興の項の中に岡崎氏の記述あり

●天明の頃

「備後の国 三原廻」 頼兼封疆の中に記述あり

これらの文献の中より「国郡志編集御用諸品書出帳」西野村の記述を引用する。

「一古城跡 頼兼 岡崎十郎左衛門頼兼、但シ当村地名ニ相成申候 城主ノ名乗也

右、岡崎十郎左衛門頼兼者、高山之城主小早川之族下也、其刻隆景公神辺之城江討手被差向、頼兼茂為加勢可能越旨被命時ニ、頼兼ノ室ハ宇都戸之城主丹下氏ヨリ娶、亦神辺之城主茂同丹下氏ヨリ娶皆一門也、依之 拒主命神辺責ニ出張無之、然ル処小早川之追手神辺之城ヲ責落帰陣、為岡崎責糸崎江陣ヲ被居、岡崎ニ者其節室懐妊ニ而有之候ニ付舅丹下氏江送返シ、城主十郎左衛門頼兼始一族家人七拾五人切腹、城ニ火ヲ掛ケ焼之仕候由、当村頼兼の祝神与申候而 御座候

右頼兼室丹下氏江婦子誕生、岡崎五郎左衛門ト云、丹下氏没落之後当村へ帰、小早川家之詮索ヲ恐レ(姓)性ヲ岡本ト改、鍛冶之業ヲ名目ニいたし住居、寛永11年戊辰相果、法名悟法全了禪定門与申候、其子五良左衛門、其子五左衛門西野村庄屋役相勤、其子市良右衛門、其子市左衛門、其子市左衛門、其子かじ屋理兵衛当時亭主ニ而七代相続仕候、家紋和泉翁ニ地翁、名乗ニ頼之字相用ひ申候、同姓の者左之通

鍛冶屋合分源次郎 鍛冶屋合分藤十郎 藤十郎合分幸蔵 幸蔵合分仲七 鍛冶屋大本両家者、元祖五郎左衛門岡崎ヲ岡本ト改名仕、以後今ニ岡本ヲ相用ヒ、藤十郎幸蔵両家長沢之苗字相用ヒ申候、是者就中改名ニ御座候、鍛冶屋より相分レ候節者皆岡本ニ御座候、右末孫之もの毎歳霜月に相集、頼兼之祝神へ幣七拾五本献神祭仕候、城跡之石垣者往還築替ニ付被用候。 ”

以上、前記の「地元の語り伝え」と同じである。

この古文書によると、戦国時代に、頼兼城は築かれ岡崎十郎左衛門頼兼の居城であり、小早川家に属していた。天文16年(1547)大内、毛利、平賀氏等による神辺城攻撃するにあたり、小早川隆景は、頼兼に参戦する様命じたが、頼兼は自分の妻が、神辺城主の杉原忠興の妻と姉妹の間柄であるためこの命令を拒んだ。(頼兼の妻と忠興の妻は宇津戸(世羅郡甲山町)の丹下氏より嫁いでいる。)

小早川隆景は、神辺城の攻撃を終えて帰陣の途中糸崎に陣をはり頼兼を討つ事にした。

頼兼は、この報を聞き懐妊している妻を丹下氏の元へ帰し、自らは戦をさけて一族75人と共に切腹し城に火をかけ亡んだ。

頼兼城は天文16年焼失、岡崎氏も名目上亡び以後城は用いられる事なく荒れていった。城跡に残っていた石垣は元和8年(1622)当時の三原城主浅野忠吉による頼兼新田の干拓や元禄期に行われた山陽往還道の整備によりとりこわされて使用されたとある。

以上「頼兼城跡調査報告書」より

実家である丹下氏の元へ帰った頼兼の妻は、こゝで一子が誕生、岡崎五郎左衛門と名乗り生長したがその後丹下氏も亡び、五郎左衛門は亡父の地西野村に帰り、小早川氏の詮索をおそれて、姓名を岡本と改め鍛冶屋を営み生計をたてゝいたが、寛永11年死去、その後子孫は七代続いているという。

岡崎十郎左衛門頼兼(頼兼城主、天文16年自刃)
↓
岡本五郎左衛門(1)(岡崎改岡本と姓を名乗る)
↓
五良左衛門(2)
↓

々と調べて見たいと思う。

① ありし頃の頼兼城の姿

どの様な城だったのか？ 居館又は水軍城、山城、いずれだったのか。

② 城主岡崎十郎左衛門頼兼とはどの様な武士だったのか。一地方の豪族だったのか。

③ 小早川氏との関係について。

④ 小坂の稲村山城（田坂一族）、三原の大島小島（現三原城になっている所）の砦との関係は、以上の事柄を中心として探究していきたい。

● **仏ヶ峠** 「山陽往還道 芸備の国境地なり」 今は忘れられた地名

仏ヶ峠は江戸時代よりの山陽往還道（昭和38年頃迄は国道2号線）上にあり、安芸と備後の国境地である。峠は昭和20年代迄は、北側南側とも山で松の木が繁り日中でもうす暗く坂もかなり急坂であり、昔は追剥が出たという位さびしい所であった。今は北側の山はけずりとられ新倉ハイツという団地になっており、南側の山もけずりとる工事中で数年後には小学校が建設される。この様にこの峠はすっかり開けてしまい、今は峠のイメージは何ひとつ無い。急坂だった道も改修工事等でけずられどこにでもある唯の坂道という位である。唯1つ団地へ入る入口の峠の所に明治3年に建てられた石標があり、その表面に従是東 備後國 従是西 安芸國という文字が読める。これが峠であり芸備の国境地であったという「証」で昔を偲ぶ以外にない。この仏ヶ峠の地名を古文書等の文献で調べて見ると次の様なものがある。

国郡志御用ニ付下しらへ書出帳 御調郡 西野村 文政2年

1. 本往還道

壱筋 本駅筋往還

東茅町境より西沼田下村境仏ヶ峠迄拾三丁拾九間

1. 芸備御境木

当村沼田下村境仏ヶ峠ニアリ、年数ヲ歴損候節者沼田下村与申談、当村ヨリ三原表へ御注進申上候得者、御調郡御役所へ御駈合被為在候而、仏ヶ峠ヨリ両郡御代官様御立合時ニ寄候得者、御番組様斗御立会御建被為成候。

国郡志編集御用諸品書出 2. 西野村 文化11年

1. 村内境目

西 沼田下村、西南 田之浦村、東南 須波村、東 山中村、北 加井知村 右五ヶ村懸り周廻凡5里、但 横山ノ鼻仏ヶ峠、金久保山能井屋之峠、掛ヶ石嬉ヶ峠 横峯つゝきか峯 榎木谷榎木ざや齋ヶ峠 登りか峯草提ひそう木こうじ谷榎ヶ峠 大目木泰雲寺町 ヲ赤石境へ沖ハ小島

1. 三原

当御城開ケ不申内者東泰雲寺今沖ハ船入小島西者仏ヶ峠横山之鼻迄皆木梨村也（以下略）

1. 茅町ヨリ仏ヶ峠 沼田下村境迄拾三町余本往還。

備後 三原廻 日本行程記に地蔵峠とあり（仏ヶ峠の事） 仏ヶ多尾（仏ヶ峠）

船山の南に有、北山備后西南の究意なり、東西は宮沖新開に向ひ、後は往還道にして、芸備国境の

榜示有、是 南は豊田郡に属す。

以上の古文書各行に仏ヶ峠の記事が見える。古はきちんとした峠名であった事が分る。

この地名の言はれは次の様な伝い伝えがある。

「仏ヶ峠」の伝われ

勝山（荒神山とも言う）の北の凹んだ所が、「仏ヶ峠」と言われ、こゝが備後における西国路の境目で越えると安芸の国へと入っていく。この峠の上に地藏尊が安置されて、その前は格好の休み場所であった。そうした事から、この峠の名も「仏ヶ峠」と呼ばれたのであろう。

……「三原昔話」 白松克太著より……

この峠が出来たのはそう古い事ではない。元和8年（1622）頼兼新田が開かれ、正保元年（1644）横山新田が開かれたと伝えられており、当時潮止めとして築かれた頼兼提防が、山陽道として整備されこの頃までは、南側の勝山と北側の横山が山続きでちいさな小道が通っていたのを切開いて通り易い様に改修したのではなかろうか。正保の頃より広い歩き易い峠道となったのだろう。当時より峠上に安置されていた地藏尊は工事にたずさわった人々が安全を祈って祭ったか又は工事中に死傷者があってそれをとむらうために祭ったのかも知れない。その昔、この峠を越える村人や旅人は峠に安置してある地藏に手を合せ安全を祈り一息入れてから西に東にと下っていった事だろう。この地藏いつの頃からなくなったのだろうか。今はその面影もなく、人々から忘れ去られてしまった。唯ひとつ芸備国境を記す石標が、あたりの風景にも、とけこめずポツンと建っており古の峠だった事を偲ぶのみである。

仏ヶ峠への交通は、三原駅前より市営バスで、新倉行に乗る。約15分位で終点に着く。着いた所が峠でありバス停の前に芸備国境の石標がある。

（三原市新倉6—20）

高地性集落について I

芸予諸島を中心にして

七 森 義 人

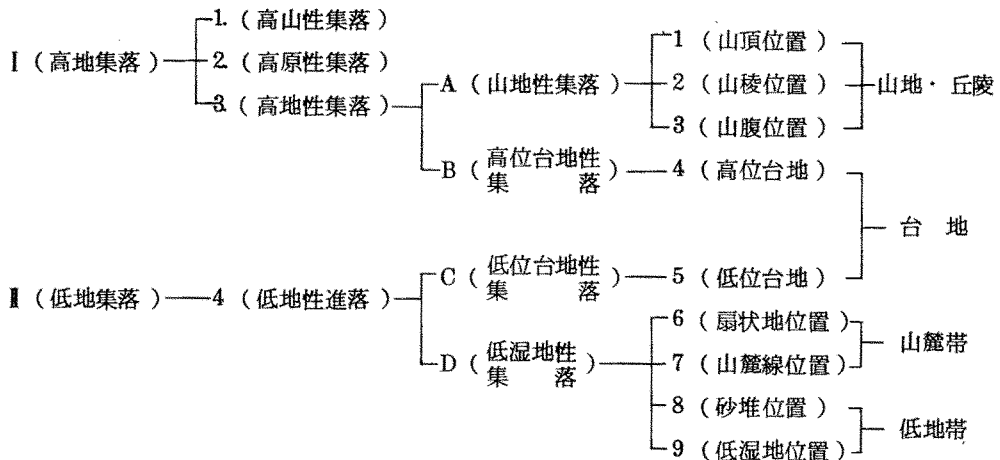
I はじめに

私がこの高地性集落に興味を持ったのは、古代山城の前身は何であろうかと探っている時に、神籠石式山城の祭政一体説（祭祀と政治は一体として行なわれる）、及び、古代山城の有る場所に山岳寺院等の宗教的遺構がある等、古代の軍事は宗教との関わりが強く、此の高地性集落は、集落という住民が住んで生活している場所で、祭祀と防衛という祭政一体の実体として此を取り上げてみる。

なお、此高地性集落が弥生時代に著しく発生し、古墳時代にはほとんど消滅していったが、此は古代山城と時期がずれているが、古代山城も急激に出現し、そしてまた消滅していった。これと似ており、なぜ急激な出現と消滅をしたのかわかれば、古代山城の急激な出現と消滅の手掛りとなるであろう。

II 高地性集落の性格

1. 高地性集落の分類法（小野忠熙氏による『城』『社会思想社刊』）



上図の様に分けられ、高山性集落とは比高に関係なく、標高が千mを越える遺跡で、高原性は、山麓斜面が開折された高原状の地形であり、私が比で記したものはAとBで1～4の遺跡である。注①

2. 高地性集落の特色

- ① 瀬戸内海、及び川を中心にして、その周囲の山麓、及び諸島に遺跡が存在していて、海運、川運、及び陸上交通の街道との関連が強いと思われます。

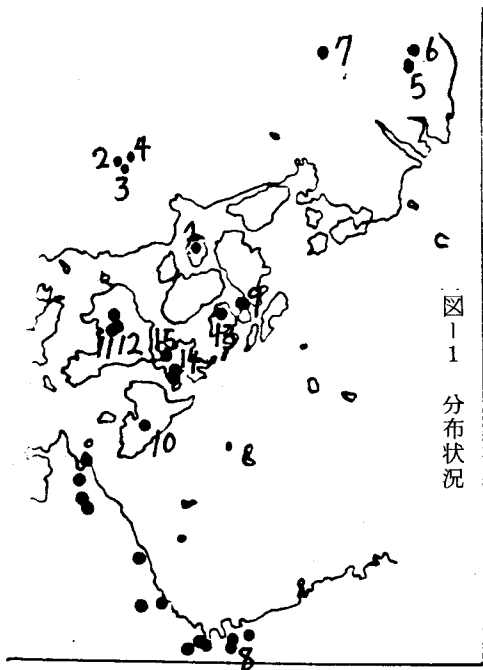


图1 分布状况

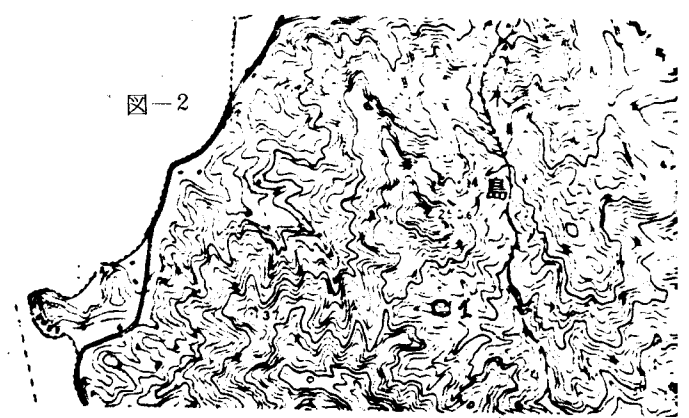


图-2



图-7



图-8

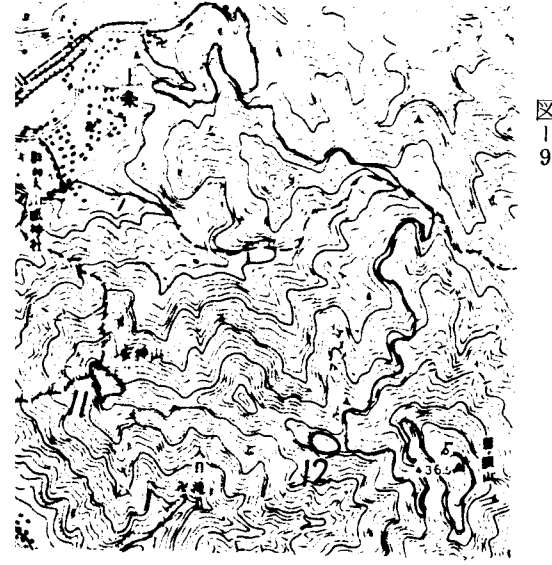


图-9

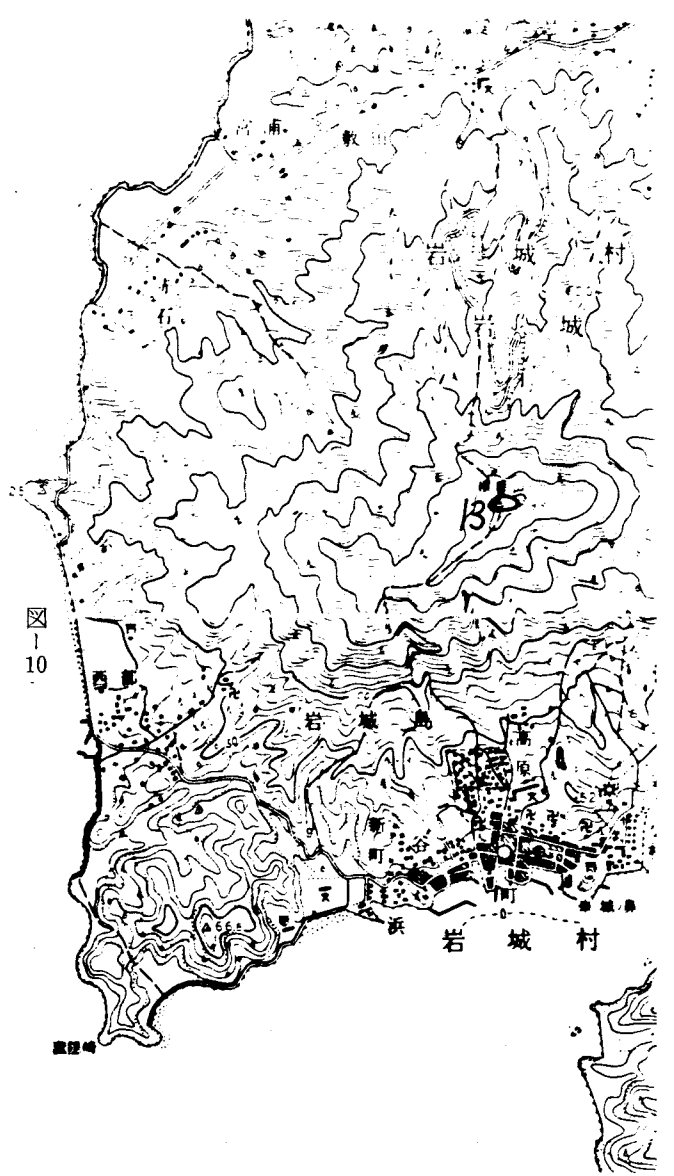


图-10

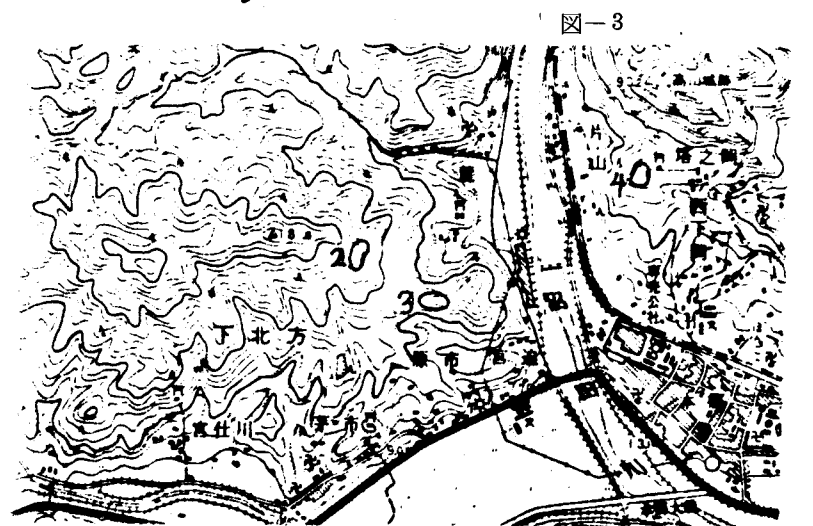


图-3

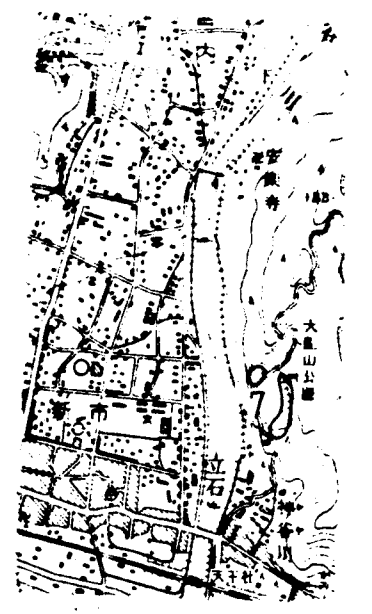


图-5



图-6

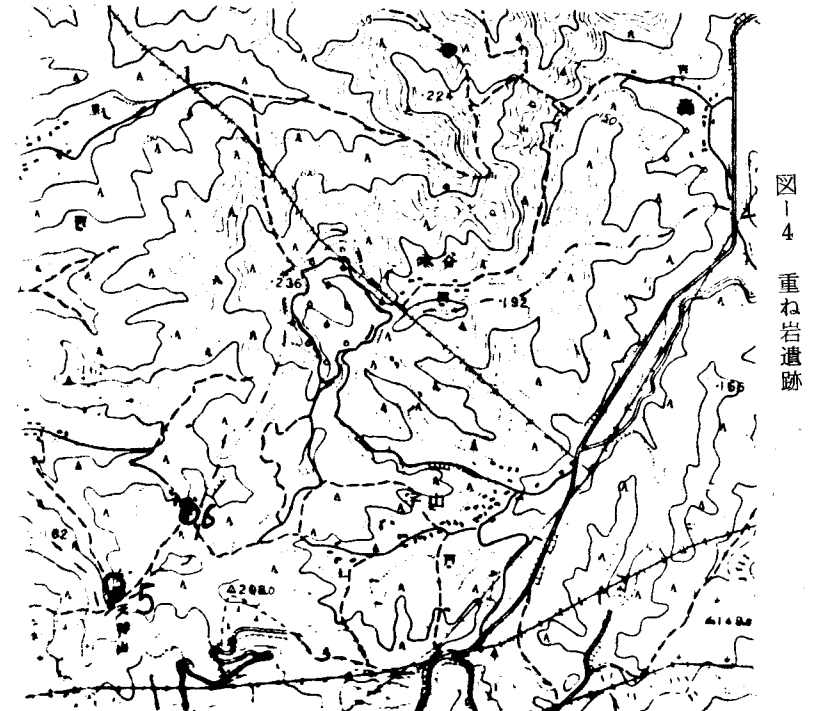


图-4 重松岩遺跡

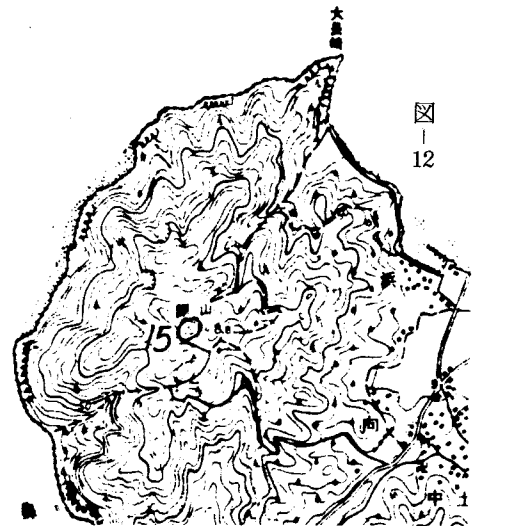


图-12

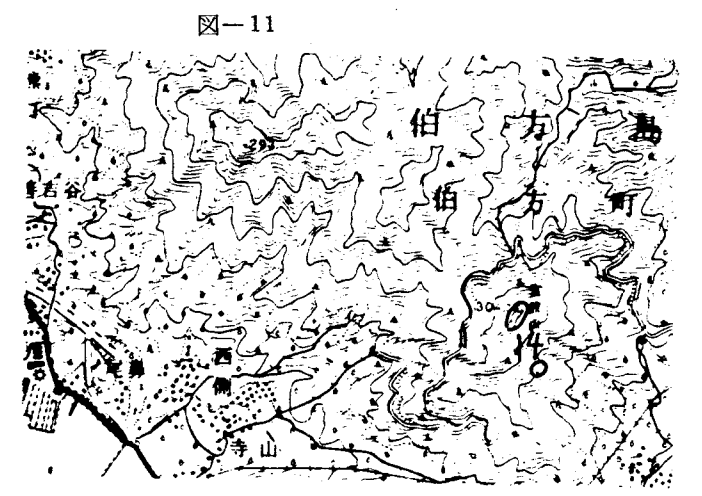


图-11

- ② 弥生時代に急激な発展をとげて、古墳時代には、ほとんど消滅していったというなぞが有る。
- ③ 海面からの比高が100mを越える高所でも、貝塚が形成されるという、海との関わりが強い。
- ④ 祭祀的遺構が多く遺跡から発見され、古代は祭祀と生活が一体であったというのが良くわかる。注②

3. 交通と祭祀

瀬戸内海の交通と祭祀に関わりが深いと思われるので祭祀の起りについて簡単に記す。

古代では自然物を拝むという自然崇拜が強く、巨石、巨木、海、川、湖、池、湿原、山等に、神が御座しますと考えていた為に、瀬戸内海を航海する時は、海の神にお供えをする。その名残りが、岡山市の高島、笠岡市の飛島、九州から朝鮮へは、福岡県の沖ノ島、又、三重県の太平洋から、伊勢湾に入る所に神島がある。そして島の漁民等は山を目印とし、神奈備型の山を崇拜する。此により、山頂等に磐座が出来る。そして、霊山を拜める様な場所の山であれば、その山より霊山を崇拜する。

4. 祭祀の分布

瀬戸内海の沿岸、及び中央航路としての場所は、岡山県岡山市の児島湾に浮ぶ高島、香川県直島町の荒神島、岡山県笠岡市の沖合に浮ぶ飛島、広島県福山市の芦田川河口付近にある、箕島の高丸磐座、同市の柳津町の竜王山の東方の天津、平岩の御磐座、愛媛県越智郡生名島の立石山の磐座・立石等、同郡の大島の八幡山の巨石等、同郡大三島の安神山の磐座、又、大三島にはドルメンがあったが、昭和の初期に破壊されたとの事である。

5. 交通と防衛

敵軍が侵入して来る時は普通、主要航路、主要街道を利用するので、その付近に、防衛、通信、望楼等の役割を持った高地性集落を造り、敵兵が侵入したら烽火台にて烽火を上げて、知らせると同時に低地の臨海性遺跡の住民によって、不意に敵船に攻めたりする。

此、臨海性遺跡とは、ソーシャル・リサーチの長井数秋氏によれば、中世の水軍と同じ様に、高地性集落にて船の見張りをして、臨海性遺跡にて、船を出す。此により、弥生時代より水軍の源形が出来たと云われる。注⑭

Ⅲ 各遺跡の性格

1. 三古志遺跡 図-2 参照

広島県三原市鷺浦町字三古志

I-3-A-C 標高130m、比高120m、東方の谷への傾斜はゆるやかであるが鞍部から西方の海岸への傾斜は急である。東方の谷への水田もしくは畑の耕作が可能かもしれない。

集落の性格としては、望楼、防衛、農耕の遺跡と思われ、眺望は、遺跡の西方の尾根の鞍部が集落と思われ、そこからの視界はあまり良くないが、此より北方約300mの標高250.6mの山頂に立てば、わずかに尾道から竹原の沖合いまで、三原方面を除けば、竹原から沿岸沿に航海する船は見渡す

事が出来る。又、遺跡より南方へ600m程行った標高260mに立てば、三原から瀬戸田まで見渡す事が出来る。弥生後期の出現である。注⑮

2. 新庄庵遺跡 図-3参照

広島県豊田郡本郷町大字下北方字籠

I-3-A-b 標高140m、比高120m、東の傾斜は急で崖状であるが、西方はゆるやかに山頂(181m)に続いている。遺跡付近は特にゆるやかで平坦である。弥生後期～古墳時代に集落があった。注⑯

3. 陣べら遺跡 図-3参照

広島県豊田郡本郷町大字下北方字原市

I-3-A-b 標高70m、比高60m、東方約200mの90mの山地に立てば沼田川が北方から東方まで見渡せる。此は、新庄庵遺跡の東方約400mの所にある。此の遺跡は遺跡もゆるやかである。付近の傾斜もゆるやかである為に防衛用としては使用できないであろう。

通常は此で生活していて、いざという時は後方の新庄庵遺跡へ行くのであろうか(古代山城の逃げ込み式、中世の詰め城の様なものであろうか)。此の遺跡は役割としては、通信、望楼の役割があっても少なく、防衛としては機能せず、農耕が役割であろう。弥生後期から古墳時代に集落が営まれた。注⑰

4. 塔之岡遺跡 図-3参照

広島県豊田郡本郷町字塔之岡

I-3-B-d 標高80m、比高60m、北方に高山城があり、北方は急である。南方はゆるやかで、西方も急である。此の遺跡はゆるやかで平坦で広い。弥生時代に出現した。注⑱

なお、2、3、4、は本郷という沼田川の良港の山腹にあり、沼田川を上下する船を見張り、又、旧山陽道が真良の方を通っていた為に、旧山陽道と、瀬戸内海航路の間に位置しており、両方へ兵を派遣するのに都合の良い場所である。(又、此付近は古墳等が有り、古代から栄えた土地である。)

5. ナメラ遺跡 図-4参照

広島県福山市蔵王町と千田町と深安郡神辺町の境である天神山から蔵王町と神辺町の境の方へ(東北)約50m程行った神辺町側の傾斜地。

I-3-A-b 標高150m、比高120m、稜線の鞍部に集落があったと思われる。北方の谷はゆるやかであるが、南方の谷はやや急である。南西の天神山に立てば、眺望が良くきき、通信、望楼防衛、農耕を兼ね備えた集落と思われる。弥生後期に出現。注⑲

6. 岩田遺跡 図-4参照

広島県福山市と神辺町の境の神辺町よりにある。

I-3-A-c 標高150m、比高120m、谷間にあり、農耕は可能と思われる。弥生後期に出現した。注⑳

なお、5、6、は、共に山稜にあるが、傾斜がゆるやかで農耕が可能で、しかも、平地からは一部が急となっている為に、防衛にも都合が良く、眺望も良くきく。

しかも、此遺跡の南方の現福山市蔵王町の深津湾に面した所は市村という良港で海蔵寺という寺の門前町で、大迫のあたりと共に此あたり一帯は古代、特に栄えていた。しかも穴海が神辺町に入り込んでいた為に、此集落の麓に船が出入り出来て、兵の移動が簡単に出来た。又、此山は、山頂付近に永谷古墳群があり、神辺町の名越に重ね岩遺跡が山中にあり、此は、高地性集落との関わりはないであろうか。私は、高地性集落のほりに結界の様な感じで祭祀を行なって道祖神と同じ様な役割をしていたのかもしれない。(道祖神とは村境^{注②}にあって、村の外から病気等の悪い神が入ってこない様に此に祀って外から悪い神が入りそうになったら追い払ってくれる神様)。もしくは、元々、この重ね岩にも集落があって、村の守り神としていたのかもしれない。

7. 神谷川遺跡 図-5 参照

広島県芦品郡新市町字神谷川

I-3-A-b 標高80m、比高60m、西側傾斜は特に急である。芦田川と神谷川が見渡せる。弥生後期～古墳時代に集落が営まれた。注②

8. 八堂山遺跡 図-6 参照

愛媛県西条市八堂山乙1-1

I-3-A-a 標高196m、比高180m、西方の河の方は傾斜で、南東への鞍部、もしくは東方への傾斜はゆるやかであり、その方面に畑作があったと思われる。山頂に集石遺構があり、霊峯石鎚山を崇拜する為のものと思われる。祭祀の役割が主で、通信と望楼も可であるが、防衛的役割はなかったと思われるが、農耕的役割は一部有ると思う。弥生中期～後期に集落があった。注②

9. 立石山遺跡 図-7 参照

愛媛県越智郡生名村立石山

I-3-A-a 標高1388m、比高130m、山頂からの傾斜は急で、しかも、山頂は東嶺と西嶺に分れている。西嶺の方に祭祀遺構の陽石、陰石、磐座、集石遺構等が有り、東嶺の方は通信用の烽火台として使用されたと思われる。又、中腹にも巨石を利用した子安観音があり、麓には、立石山の名がついた所以である、高さ7m、周囲5mの立石が有り、全山が祭祀的遺構と思われる。此よりの眺望は因島、弓削、佐島、岩城島、生口島と南方は少し見えないが各水道が見渡らせる。注②

10. 八幡山遺跡 図-8 参照

愛媛県越智郡吉海町八幡山

I-3-A-a 標高215m、比高190m、山頂から八合目にかけて遺物が出土しており、山頂一帯は祭祀的意識の有る巨岩群がある。山頂付近は平坦であるが岩がごろごろしている。弥生中期～後期に集落があった。祭祀と防衛(待避)的な集落で、農耕、望楼は出来ないと思われる。注②

11. 安神山遺跡 図-9参照

愛媛県越智郡大三島町安神山

I-3-A-a 標高260m、比高250m、此より鷲ヶ頭山への傾斜はゆるやかであるが他は急傾斜である。山頂は平坦で巨石(磐座)があり、古代から現在まで勢力のある大山積神社の御神体山であろう。弥生中期～後期の遺跡で祭祀のみの、役割であろう。注⑳

12. 鷲ヶ頭山遺跡 図-9参照

愛媛県越智郡大三島町鷲ヶ頭山

I-3-A-b 標高320m、比高310m、稜線上の傾斜はゆるやかであるが、北、南、共に急傾斜である。弥生中期に出現した。集落の役割としては山頂が平坦であるので農耕が考えられるが、少し狭すぎるが、通信、望楼は共に不向きな場所で、東方の鷲ヶ頭山にさえぎられ、視界は大山積神社方向のみである。防衛的待避集落としての役割があるのかもしれない。注㉑

13. 積善山遺跡 図-10参照

愛媛県越智郡岩城村大字積善山

I-3-A-a 標高369m、比高320m、傾斜はどの方面も急である。弥生中期に出現した。集落役割としては、祭祀と望楼と通信の役割をもっていると思え、防衛するだけの平坦さと、農耕するだけの平坦さと水がないと思われる。注㉒

又、北方の標高約160mの所に妙見山があり、ドルメンの様な巨石がごろごろとしている。西部にも巨石群が有る。

14. 宝股山遺跡 図-11参照

愛媛県越智郡伯方町有津矢取畑

I-3-A-a 標高304m、比高270mの山頂とその東南の標高190m、比高160mの二ヶ所にある。山頂は東北から山頂が平坦で、山頂から南西は、何ヶ所かのピークがあり、岩がごろごろしており、山頂には石仏があった。弥生中期から後期の集落で通信と望楼と祭祀の役割を持っていると思われる。又、此山の北西270mの山に寺院が有り、古代の山岳寺院の名残りか、ただし、現在の寺は新しいのでそれよりも古いかどうかはわかりません。注㉓

15. 開山遺跡 図-12参照

愛媛県越智郡伯方町伊方開山

I-3-A-a 標高148m、比高140m、標高100m以上はわりとゆるやかであるが、西海岸へは急傾斜である。弥生中期に出現し、通信、望楼、防衛、農耕の役割を持った集落であろう。

又、此からは古代海城と云われる甘崎城をも見る事ができる。注㉔

Ⅳ 総 ま と め

私は古代山城の前身として高地性集落がそれではなかろうかと書いたが、時代的にも奈良時代まで継続する遺跡はまったく無く、古墳時代で完全に消滅していったと共に、高地性集落と古代山城の重積している所は、山口県の石城山、香川県の城山ぐらいしか無い。

いろいろな高地性集落を書いたが、最重要点としては、此らはすべて海上、陸上光通に何等の関わりが強く、うまく行けば古代の航路の解明にもつながる。又、古代山城も古代交通との関係があるから、何等かの解決につなげていきたい。

<参考文献>

- (注) ① 「城」 小野忠熙
② 「吉備考古」36、「八堂山」
③ 「神道考古学講座」2
④ 注③同
⑤ 注③同
⑥ 「神道考古学講座」5
⑦ 注③同
⑧ 広島県埋蔵遺跡地図
⑨ 柳津村誌
⑩ 「ソーシャル・リサーチ」1.3 「愛媛の文化財」
⑪ 「ソーシャル・リサーチ」1.3
⑫ 注⑩同
⑬ 伊予史談 57
⑭ 注⑩同
⑮ 三原市史 国土地院 25万分の1「三原」
⑯ 「陣べら遺跡群」 広島県史(考古編) 本郷町役場発行 54分の1 Ⅸ.6 地形図
⑰ 注⑯同
⑱ 注⑯同
⑲ 「緑ヶ丘遺跡群」 国土地理院 国土基本図 111-PG 48-3
⑳ 「緑ヶ丘遺跡群」 国土地理院 国土基本図 111-PG48-1
㉑ 「岡山県史」15
㉒ 「吉備考古」75 新市町役場発行 25千分の1 Ⅸ.4 地形図
㉓ 「八堂山」、「ソーシャル・リサーチ」、西条市役所発行 2.5千分の1 Ⅸ.26 地形図
㉔ 注⑩同 国土地理院 5千分の1 国土基本図 111-QG 33
㉕ 「ソーシャル・リサーチ」1 吉海町役場発行 1万分の1 地形図

(注) ㉔ 「ソーシャル・リサーチ」1 国土地理院 2.5万分の1 「木浦」

㉕ 注㉔同

㉖ 「ソーシャル・リサーチ」3 国土地理院 5千分の1 国土基本図 111-QG42

㉗ 「ソシアン・リサーチ」3 伯方町役場発行 1万分の1 地形図

㉘ 伯方町役場発行 1万分の1 地形図 「高地性集落の研究」

※ 2.5万分の1「三原」、「竹原」、「神辺」、「新市」、「西条」、「備後土生」、「幸新田」、「木浦」の地図を図版に使用。

編 集 後 記

冬がやってきました。雪の季節です。

暖かいこたつでみかんを食べる事よりも、この時期こそ外に出て調査活動をといた面々の力作が集まり、ようやくでき上りました。

雪の上にしかりと足跡を残した様な気持ちです。

(露雪記)

1988年12月

山城志第2巻5号

編集発行 備陽史探訪の会城郭研究部会
古墳研究部会

連絡先 〒720 福山市多治米町916

田口義之方

TEL (0849) 53-6157

印刷 塩出印刷所

福山市引野町1丁目316

TEL (0849) 41-0970 (代)

